The Birth of Logos
——The Theology of Sin and the Law and Will to the Power in New Guinea Highlands——

by Mitsuki SHIOTA

Papua New Guinea is now in the state of ideational exaltation.

Kinjalo Ape of the Imbonggu in Papua New Guinea Highlands has contrived the theology of Sin and the Law by reading through the Bible.

He divides mankind into two categories. One is the Judas, who are equated with white people and the other is the Gentile, who are equated with the rest of mankind including Papua New Guineans.

According to Kinjalo, only 144 thousands of the Judas have been destined to salvation by God and the Gentile were forlorn. But, through the decision of Jesus Christ to die his death outside the city of Jerusalem at the hill of Golgotha, there appeared the hope of salvation for the Gentile.

The blood of Jesus having been shed at Golgotha can wash the sins committed by the Gentile and cleanse the Gentile who are baptized by water and blood of Jesus. After the baptism, the Gentile are not allowed to commit any sin again nor break the Law. They must keep cleanliness given by baptism. The Heaven is the Kingdom of cleanliness where only sinless clean people can enter.

Only faith in Christ is not enough for salvation. One must abide all the Law meticulously to keep himself sinless and clean enough to enter the Heaven, because the Law is the will of God.

On that point, Kinjalo's theology is opposed to that of Disciple Paul who claimed that only the faith in Christ and the possession of the Holy Spirit has the power to lead the Christians to salvation and the Law is

powerless.

With this theology in hand and with strong self-repression, Kinjalo enforces his words to the fellow villagers and prayers in glossolalia to the world. This is the new type of exertion of authority based on the transcendental knowledge of the Holiness.

ロゴスの誕生

―― ニューギニア高地における罪と律法の神学と権力 ――

塩　田　光　喜

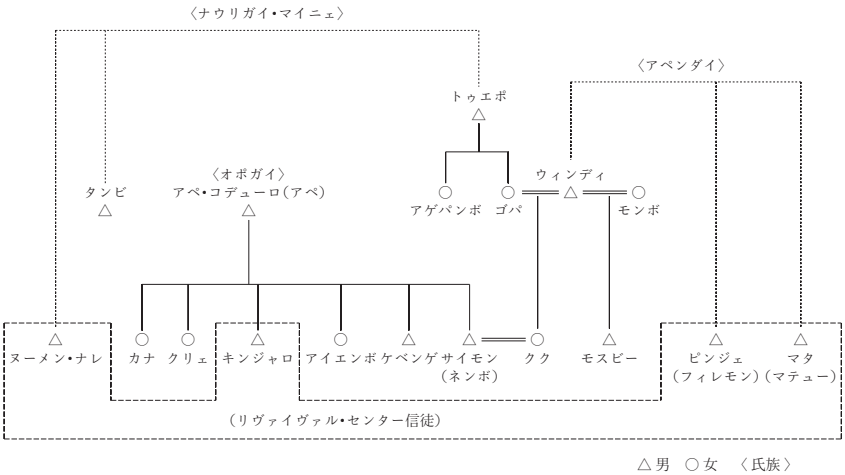
はじめに

パプアニューギニアは，今，観念的発熱状態にある。

2007年７月31日の『パプアニューギニア・ポストクーリエ』紙によれば，2007年，オロ州においては４つのキリスト教的異端セクトが出現し，23000人もの人々が入信しているという。

その内の一つは『キリスト降誕教会，生ける石の聖職者』と名乗り，死んだ

［主要登場人物の系譜関係］



祖先が莫大な富をもってこの世に帰ってくると信じているという。これはオセアニア研究者にはなじみの深いカーゴ・カルトの教義である。しかし，興味深いのはこの異端セクトの創始者がかつて，アングリカン（英国国教）教会の司祭であったことである。そして「生ける石」とは新約「ペテロの第一の手紙２，４－８」でキリストを指す隠喩として用いられている言葉である。

パプアニューギニアはその憲法で，「クリスチャン・カントリー」であるとうたい，国民の95％は少なくとも名目上はキリスト教徒であると名乗っている国である。

そして，文字の読める国民であれば，多少の差はあれ，少くともパプアニューギニア人の大半がしゃべれるピジン英語訳の『聖書』，特に『新約聖書』を読んでいる。そして，彼らが読むほとんど唯一の書物が『聖書』なのである。

すなわち，文字が読めるほどのパプアニューギニア人であれば，彼の世界観を『聖書』に準拠して構築するのである。

ここで留意すべきは，近代的知の体系と『聖書』に集約されているキリスト教的知の体系は根本的に異なるということである。

近代西洋文明は古典古代文明とキリスト教文明を基盤としていると言われる。しかし，近代西洋文明はむしろ，キリスト教を出自としながらも，キリスト教の世界観を否認することにより形成されたのである。その事を鋭く見抜いたのが，フリードリヒ・ニーチェであった[(1)]。彼の有名な「神は死んだ。神は死んだままだ。そして我々が神を殺したのだ」（『悦ばしき知識』125）という言葉は，デカルト以降の近代思想史の核心を衝いている。

現代におけるその顕著な現れが，教会売却である。オーストラリアでは，今，多くの教会が売りに出されているという。ユナイテッド・チャーチという宗派は今後40年の間に350の教会を売却する予定だという。またアングリカン教会もメルボルンの３つの教会を閉鎖した。ユナイテッド・チャーチの売却状況は上々で年間約10の教会が売れているという。そして，売却された後は住宅やギャ

ラリー，アスレチック・ジムなどに改築され，教会のリノベーションは最近の流行だという。（Courier Japon 2007／05／13）再び，ニーチェの言葉「教会とはいったい何だろう，―神の墓穴，その墓碑でなければ」（『悦ばしき知識』125）が想起される。

一方で，パプアニューギニアの『キリスト降誕教会』においては信者が252本の柱を持ち寄り，500室からなる教会を建てたと報じられている（『ポスト・クーリエ』2007／07／31）。そして，信徒達は貧しい収入の中から多額の金を寄進して，黒い十字架を建て，イエス・キリストをパプアニューギニア人として描いているという。

今や，キリスト教は近代西洋諸国の宗教ではなくなり，発展途上国の宗教となりつつあるのだ。そして，発展途上国のいたる所で，新たな預言者が現れ，新たな神学者が生まれつつある。

拙著『石斧と十字架―パプアニューギニア・インボング年代記』においても，そうした新たな預言者の誕生を描いたが，本稿では21世紀に入って出現したニューギニア高地のインボング族の新たな神学者とその特異な教義を描写・分析することにより，その世界史的意義を明らかにすることを目的とする。

キンジャロとの出会い

まず，本稿の主人公である神学者キンジャロ・アペの背景となるニューギニア高地のインボング族とその文明史について簡単に素描しておこう。

インボング族は1953年，時のオーストラリア統治府による統治が始まるまで，新石器時代にあった[(2)]。

新石器時代のインボング社会の政治・軍事的主権団体は村（コンブ）であった。村々はあるいは互いに同盟を結び，あるいは互いに戦い合い，各々のテリトリーに群雄割拠していた。戦いの原因は土地の争奪ではなく（土地なら余っ

ていた），呪殺をも含めた殺人，ブタの畑荒らしのような財産侵害が引き金を弾く事が多かった。その根底には，村同士の互いに何代もの過去に遡る怨恨と不信によるホッブズ的「万人が万人に対しての戦争状態」が横たわっていた。このような不信の中，村の男達は夜になれば，妻子の居る家から，村の大広場（ペナ）に面して建てられた「家長の家」（ガパウゲ）に集まり，朝焼けが空を金色に輝やかせるまで，三交代で不寝番をするのであった[3]。

インボング族の村は戦士共同体だったのである。成人男子は一人一人が皆，戦士であった。男達の仕事は戦うこと，祭りや儀礼を執うこと，そして，戦さや祭りのための合議を行うことだった。焼き畑を拓くための労働や男しか持てない石斧による薪作りといった僅かな労働を除く生産活動は妻達の役割であった。妻は夫が拓いた焼き畑に主食のサツマイモやタロイモを植え，除草し，収穫した。そして，インボング族の富の形態であるブタの飼育をするのも妻の仕事であった。ブタはマガリと呼ばれる贈与儀礼において，同盟村の男達に与えられるか，婚資として用いられるか，コンギ・トモロと呼ばれるブタ屠殺儀礼において蕩尽されるか，いずれにせよ村同士の関係を織り上げるための贈与財であり，その処分は夫の手に委ねられた。

男達の富の大いさは，その所有するブタの数によって量られた。そして，公的行事が催される際には，ブタと真珠母貝のペンダントを提供することが，男達に求められ，男達もその贈与の大いさを競い合ったのである。

こうしたインボング族の村は「土地の主」（マイ・プギエ）と呼ばれる父系氏族（イエププ）または氏族対と神話によって結びつけられていた。たとえば，アンブプル村ならクリガイ氏族とナウリガイ氏族の氏族対と同一視され，〈クリガイ〉〈ナウリガイ〉と呼ばれた。イミ村はモンガイ氏族と，カウリェンゲ村はメルパアガイ氏族と，ペアンベル村はコレ氏族とペライエ氏族の対と神話上の結合を持っていた[4]。

こうして，インボングの村はマイ・プギエと呼ばれる父系氏族ないしは氏族

対と概念上，等置されたが，たとえば，アンブプル村の成員がクリガイ氏族とナウリガイ氏族からのみ成り立っていたわけではない。アンブプル村はクリガイ，ナウリガイのいずれかと婚姻関係によって結ばれた他氏族の成員も数多く含んでいた。たとえば，1920年代に，内紛により，本貫の地から逃れてきたウィルモゴイ氏族とアペンダイ氏族の分枝は，〈クリガイ〉〈ナウリガイ〉〈ウィルモゴイ〉〈アペンダイ〉と呼ばれ，〈クリガイ〉〈ナウリガイ〉氏族対に次ぐアンブプル村の構成要素とされている。その他にも，個人的な関係を伝って，アンブプル村に妻方，母方居住をしている者は少くない。

キンジャロの一家もそうした移住家族の一つである。

キンジャロの一家はオポガイ氏族に属する。オポガイ氏族の本貫の地はアンブプル村の隣村コロパンギ村である。オポガイ氏族とキリポガイ氏族はブタの腹から生まれ出たという神話を持ち，コロパンギ村のマイ・プギエ（土地の主）であった。だが，はるか昔，戦さに敗れた〈オポガイ〉〈キリポガイ〉は本貫の地コロパンギを捨て，一分枝はインボングの地，コロパンギから30キロ離れたゴゴプゲに，一分枝はカンビアの地，コロパンギを去ること50キロのゴミ村に，一分枝はメアミの地に逃れ去った。ただし，オポガイ氏族の内，幾名かは実はアンブプルに残り，ナウリガイ氏族のサブクラン（支族）〈ナウリガイ・マイニェ〉の成員に編みこまれたという。

キンジャロ・アペは1973年，ゴゴプゲ村に生まれた。

だが翌年，キンジャロの父，アペ・コデューロ（以下，アペと呼ぶ）はブタ盗みの諍いから弟の妻と娘を天神に祈って殺したとの科で，ゴゴプゲを逐われることとなった。アペとその妻，娘，息子（キンジャロの次兄ケベンゲ）と母に背負われたキンジャロのアペ一家は，一族が暮らしているカンビアのゴミ村へ移住しようとして，アンブプル村まで下ってきた時，オポガイ氏族の残存者の子孫とされるアンブプル村の指導者（ビッグマン），〈ナウリガイ・マイニェ〉支族のタンビに引き留められ，アンブプル村のカリリポイの丘に土地を与えら

れて住まうようになったのである[5]。

アペ一家のアンブプル移住の後，女の子が二人生まれたが，奇矯な専制君主であったアペ老人の振る舞いに妻は去り，長女のアイエンボは親族の住むタリの町へ，次兄ケベンゲは母方の祖母の住むイアリブ郡庁所在地へと逃げていった。幼さゆえに，アペ老人のもとから逃げ出すことのできぬ末娘クリェとカナだけが，アペ老人とともに暮らし，私がフィールド・ワークでアンブプル村へ入った1985年，キンジャロはオポガイ氏族の残党の子孫と言われる〈ナウリガイ・マイニェ〉支族のタンビやタウエンジョの家や友達の家に寄食しながら，転々としていた。

私がキンジャロと出会ったのは，キンジャロの長兄サイモン・アペにパプアニューギニア大学で出会い，サイモンの招きでアンブプル村へと入ったからである。そうした縁で，キンジャロ（当時12才）は私と暮らすようになり，私のフィールド・ワークの2年間，アシスタントのような形で私と行動を共にするようになったのである。

インボング文明史

ここで，キンジャロの人生の背景となるインボング文明史を一瞥しておこう。1953年，オーストラリア統治府がイアリブの地にパトロール・ポストを置き，インボング統治を始めるまで，インボング族は新石器的戦士共同体である村々が割拠しており，絶えざる戦いの内にあった。イアリブの地にパトロール・ポストを置き，インボング族をパックス・オーストラリアーナ（オーストラリアの平和）の下に治めようと，イアリブに駐在したパトロール・オフィサー（巡回統治官）とその配下であるパプア人警官達はその優れた銃器を駆使して，各所で起こった戦争の鎮定のため奔走した。新石器部族民であったインボング族の武器は石斧に，弓矢，木製の槍と盾であったから，白人巡回統治官の武力上

の優位は圧倒的であった。老人達の回想では，一瞬，雷鳴のような轟音がして白人の持っていた杖が火を吹くと，その場に居合わせた者達はパニックに陥ったという。そして，白人統治官は，この武力上の優位をもって，戦さを行っていたインボングの戦士達を容赦なく，イアリブ駐在所に掘っておいた巨大な牢獄へと投獄していった。それはインボング族がかつて経験したことのない苦役であった。そもそも，インボング族の地では，ある成人男子または集団が他の成人男子または集団の自由を束縛して，生かしたまま苦痛を与えるという事例は絶えてなかった。インボング族の戦士達はホッブズの描く自然人のように自由で独立した存在であり，互いに戦い合い，殺し合い，放逐することはあっても，服従という権力関係に入ることはなかったのである。白人の持つ，火を吹く杖はこうした，自由で独立したインボング族のなかに懲罰という全く新たな人間関係をもたらしたのである[(6)]。

「わしらと敵の連中達との戦争は白人が来た時に変わった。わしらが，さあ，戦おうとすると，白人は警官達を寄越してきた。警官達はわしらに発砲し，投獄し，わしらのブタを撃ち殺した。それで，わしらは怖くなり，それまでの習慣を変えたのだ。そしてこの時から，わしらは平和を手に入れ，どこででも眠れるようになったのだ。昔は，誰もが自分自身のボスだったものだが，白人が来た時，それは終わった。なぜと言うなら，パトロール・オフィサー（白人統治官）がわしらを支配したからだ[(7)]。」

もちろん，インボング族の戦士の中にも，時代の潮目の変化をいち早く読み取り，白人に帰順し，白人の支配体系の最末端の原住民警察官の地位を手にした者もいる。

キンジャロの父，アペ・コデューロもそうした一人であった。彼は，1955年，白人統治官により，原住民警察官に任命され，白人統治官を助けて，彼のインボング鎮定に力を尽くした[(8)]。

こうした，白人権力の介入により，インボングの地から，戦争は消え，白人

統治官によるパックス・オーストラリア（オーストラリアの平和）の第一章が始まった。

アペは白人の駐在していたイアリブ・ステーション近在の女をめとり，1960年，二人の間に初めての男の子が産まれた。アペは長男の名をネンボと名付けた。

こうして，白人統治官の手により，戦争が収まり，平和が出来すると，待ちかねていたように，異教徒に神の福音を説き，魂の救済を施そうとするキリスト教の宣教師達が到来した。

イアリブ・ステーションにはカトリック教会のカプチン派宣教団が教会を開いた。そして，診療所を開設し，小学校を建てた。こうして，インボングの地の南半はカトリックの布教圏となってゆく。

一方，インボングの地の北端に近いカウペナという土地には「バイブル・ミッション」という，アメリカ南部の聖書原理主義教会から分離した宣教団が入った。バイブル・ミッションは1957年に宣教駐在所（ミッション・ステーション）を開くと，1959年にはこれもまた診療所と小学校を開設した[9]。

こうして，インボングの地の南半はカトリック教会の，北半はバイブル・ミッションの勢力圏という棲み分けができ上がってゆく。

宣教団がまず行ったのは，伝統的宗教儀礼を悪魔の業として消滅させることだった。宣教団は，オーストラリア統治府の威を借りて，伝統的な神々や精霊に供犠を行い，祈りを捧げることは禁止されたのだと称して，伝統的宗教儀礼を押さえこむことに約十年をかけて成功した。

次に，宣教団が行ったのは村々に牧師を任命していくことだった。たとえば，アンブプル村ではバイブル・ミッションから牧師を一人出せと言われて，これも統治府の命令だと思いこみ，アペンダイ氏族の若者テルムを牧師に選んだ。こうして選ばれた牧師（カトリック側では司祭）はバイブル・トレーニング・カレッジ（聖書訓練校）に送りこまれて識字と聖書の教育を受けて，村へ戻ると茅葺きの教会を建てて，説教を始めた。こうして，村々に教会が建ち，女達

が礼拝に通うようになっていった。

その頃には，統治府が導入した貨幣も流通を始め，ポンド札がかつての真珠母貝のペンダントに取って替わった。そして，人々の間には，白人もすなるビジネスを自らもせんとビジネス熱が蔓延していった。

そうした，文明化へ向けての大きなうねりの中，アペ・コデューロの長男ネンボは祖母の手元で育てられ，イアリブのカプチン派宣教団の経営する小学校へ入り，サイモンという英語名を与えられた。

サイモンは目から鼻に抜けるような聡明な少年であった。彼はアルファベットを覚え，英語の手ほどきを受けると，図書室にあった本を次から次へと読破していった。無論，成績は図抜けて良く，小学校を卒業すると，選ばれてインボングの地から西へ150キロほど離れたタリの中学校へ入学した。これは当時のインボング族にあっては異例のでき事であった。1972年の事であった。

1972年という年はパプアニューギニアにおいて，第3回の総選挙が行われ，独立派議員がマジョリティを占め，1975年の独立へ向けて大きく舵を切った年である。

サイモンはタリ中学に寄宿し，学期休暇ごとに150キロの山道を歩いて親元に帰った。1974年にアペ一家がアンブプル村に移り住むと，サイモンはアンブプルに帰るようになった。そして，サイモンはその聡明さを村のリーダーであったナウリガイ氏族の指導者タンビに愛でられ，タンビの薫陶のもとに，インボング社会における帝王学を学んでいく。同時に，タリ中学における近代教育においても抜群の成績を上げ，トップの成績でパプアニューギニア海岸部の町マダンの高校へと進学する。当時，パプアニューギニアには4校しか高校がなく，高校へ進学するということはエリート中のエリート候補生であることを意味した（ちなみに当時の高校は皆，国立であった)。1976年のことである。

当時，1975年の独立に伴い，白人官僚はオーストラリアへと去り，空いたポストは，パプアニューギニア大学やラエ工科大学の卒業生達によって占められ

ていった。

サイモン・アペが1978年にマダン国立高校を卒業した時，主要ポストは先行世代によって占められていた。サイモンは生まれるのが数年遅かったのである。

マダン国立高校を卒業したサイモンはパプアニューギニア大学へは進まず，インボングの地の北隣りの西高地州の衛生官（ヘルス・オフィサー）に就職する。そして，1980年に同じアンブプル村のアペンダイ氏族のウィンディの娘ククと結婚し，二人の息子を儲けた。

だが，自らの才能に自信を持つサイモンは1984年，衛生官の職を辞し，翌85年，首都ポートモレスビーにあった最高学府パプアニューギニア大学に入学，そこで，折からパプアニューギニアで人類学調査をするためポートモレスビーに入った私と邂逅するのである。

インボング族における聖霊運動

1985年6月，私はサイモン・アペとともにアンブプル村へと赴いた。サイモンは休暇が終わると，大学へと戻って行き，私は村に残って，サイモンの家で暮らし始めた。同居したのは，サイモンのしゅうとのウィンディ老人，その息子サニ，それにキンジャロであった。サニはカウペナの小学校に通っていたが，キンジャロは学校へ行っていなかった。そもそも，キンジャロは学校というものに通ったことがなかったのである。幼いころから，家を飛び出し，他人の家を転々と居候して暮らしてきたキンジャロは，学校へ行く機会を持てなかったのだ。

しかし，キンジャロはサイモン同様，鋭利な頭脳を持っていた。自然，私はキンジャロに調査助手としての信頼を置くようになった。キンジャロも私と過ごすことにより，雨露をしのぐ宿と米の飯には不自由しなくてすむようになった。

こうして，わたしとキンジャロは互いに依存しながら，1985年から1987年の

2年間をともにすごすことになったのである。

アンブプル村はバイブル・チャーチ（バイブル・ミッションはパプアニューギニア独立後，そう改称していた）の村で，バイブル・チャーチの建てたトタン屋根の大きな教会が建っていたが，私の調査目的は伝統文化を老人達の聞き書きによって再構築することにあったので，教会へは一度も訪ねたことがなかった。牧師のテルム老人が，日曜には教会に通うよう慫慂しに来たが，私は教会へは足を向けなかった。キンジャロもウィンディ老人も信者ではなかったので，ホスト・ファミリーの中で，教会へ通うよう促すのは，ウィンディ老人の第一夫人ゴパのみであった。1985年の暮れには，サイモンの不倫を詰ったため，サイモンの妻ククが二人の幼い息子達とともに村に送り帰されてきた。私は村の大工に建ててもらった私の家に移り，ククがサイモンの家で住まうようになった[10]。

こうして，1986年になり，乾期（5月～9月）を迎える頃，インボング族のバイブル・チャーチの支配下にある村々を，一大宗教運動が吹き荒れた。その引き金を弾いたのは，ルートという二十すぎの女性が死んで，天国へ昇り，イエスの案内で天国を見て回り，生き返ったという事件であった。噂はインボングの地を吹き抜け，アンブプル村でも夢や奇蹟を見る者が現れ，それまでは既婚夫人やその幼い子供達しか集まらなかった村の教会へ，男達や若者達も加わるようになり，悔い改めてキリスト教へと改宗する者が引きも切らぬようになった。金曜の朝と日曜の朝夕だけであった礼拝が毎日になり，しかも，夜の二時，三時までくり広げられるのである。説教，聖歌，懺悔，神のお告げ，夢や奇蹟の報告，お祈り，教会での礼拝は止まることを知らず，その頂点では感極って号泣する者，踊り始める者，抱き合う者，もはや，牧師のコントロールを離れてエクスタシーの状態に登りつめるのであった[11]。

そして，アンボ・ルートがカウペナの教会へやって来て，自らの死と天国での体験と終末の切迫の預言を語ると，改悛者はますます増えてゆき教会へ入り

きらないほどになった[12]。

その一週間後，ククに聖霊が降臨し，ククは使徒ペテロらがペンテコスト（五旬祭，聖霊降臨祭とも言う）の日に授かったような，異言の能力を授かった。またククの母ゴパの妹，アゲパンボは預言の能力を授かった。以後，アンブプル村の終末運動はククとアンゲパンボを中心に展開していった。今や，聖霊が降臨するのは教会ではなく，ククの，すなわちサイモンの家であった。毎夜，ククの家では祈祷の集会が催され，村人達は入れ替わり立ち替わり，ククの家で聖霊を受けた[13]。

困ったのはキンジャロである。サイモンの家で兄嫁のククと暮らしていたキンジャロは，否応なく，夜ごとの集会に加わらざるを得なくなった[14]。

しかし，キンジャロは醒めていた。熱狂する村人達の中にあって，他人の家で苦い飯を食ってきたキンジャロには，世知辛く利己的な人間の性が，一回や二回の悔い改めで変わるほどやわなものだとはとうてい信じられなかったのである[15]。

乾期（その年は，ひどい日照りの年で村を流れるカウエ川は乾上がった）もひけてくると，さしもの熱狂も峠をこした。その端的な現れは神の子として互いに兄弟姉妹として愛し合ってきた村人達の間に再びいさかいが生じたことである。そして，ある日，村の既婚の男達と未婚の男達の間に大げんかが起こった。その後，熱狂は急速に冷めていった。そして，村人達には次の雨期に向けて畑を焼き，畑を作らねばならない時が迫っていた。神は出エジプトのイスラエルの民に荒野でマナを降らせたように，食物を天から与えてくれはしなかった。人々には空腹とともに理性が戻ってきた。

雨期が始まると，熱狂の中で身を潜めて沈黙を保ってきた村の長老，リーダーのタンビやその副官格のウィンディ老人が，その年のクリスマス・シーズンに挙行する予定であるブタ屠りの儀について村人達に思い起こさせ始めた。

村の男達はブタ屠りの儀について評定を始め，女達は畑にサツマイモを植え

ていった。

再び，村の日常が，その生のリズムとともに帰ってきたのである。

しかし，熱狂の日々は村の何人かの男達の生の軌道を大きく変えることとなった。タンダは牧師となる決心をし，バイブル・トレーニング・カレッジへと向かい，ピンジェは熱心な信者として教会へ通い続け，ピリゲ，コヤポ，パンジポら既婚の男達も酒やタバコ，ビンロウを断ち，信者としての勤めを続けた。そして，熱狂の嵐はキンジャロ達，少年の心にもその痕跡を刻み込んだのである。

回心に到るキンジャロの生の軌跡

その後のキンジャロの歩みを馳け足で瞥見しておこう。

私は1987年４月にパプアニューギニアを去った。

その直後，第３回パプアニューギニア総選挙が公示され，選挙キャンペーンが始まった。サイモン・アペは現職のグライミー・ワレナと確執が生じ，タリ中学時代に面識のあったビジネスマン，アンソニー・テモを立て，自らは後援会長となって，アンブプル村のリーダー，タンビの影響力を通して近在一円の村々の票の取りまとめを行い，さらにはアンブプル村のナウリガイ氏族とそれに連なる諸氏族の若者を動員して，大がかりなキャンペーン活動を展開した。そのキャンペーン隊の中にキンジャロの姿もあった[16]。

７月の総選挙の結果，アンソニー・テモは当選し，さっそく，建設大臣に任命され，サイモンは大臣秘書となった。サイモンはかねて密かに謀っていたククとの離婚に備えて，息子二人を手元に置くべくキンジャロに命じて息子二人をポートモレスビーに連れてこさせた。キンジャロ初めてのポートモレスビー体験であった。以後，キンジャロはポートモレスビーにおいてサイモンと行をともにする。

３年後の1990年，サイモンは大臣アンソニー・テモや彼の友人である白人実

業家のコネクションを利用[17]して，オーストラリア人古着商と渡りをつけ，ポートモレスビーのバディリ地区の倉庫を改装し，巨大な古着屋を開店した。

これがパプアニューギニアにおける古着ビジネスの濫觴となる。

それまで中国製の安物衣料を購入していたポートモレスビー市民は，中国製よりも安価でしかも良質なオーストラリアの古着を選好し，サイモンの古着屋は栄えに栄えた。

翌1991年，サイモンはポートモレスビーに3店舗を構え，更に，ラエ，ラバウルといった地方の中心都市にも出店した。そして，サイモンはラエ支店にキンジャロを送りこみ，管理の任に宛てた。

サイモンの古着店の繁栄を見て，追随者が次々に現れ，古着ビジネスはパプアニューギニア全土に広まった。中には，店舗を構えず市場でより安価に売る者も現れた。

こうした厳しい競争の中でサイモンの古着の売り上げは急落していった。そして，1995年にはサイモンの古着チェーンの内，ラエとラバウルの支店は閉店に追い込まれ，キンジャロはポートモレスビーに戻る。

サイモンのビジネスはその後も衰え，ポートモレスビーの2支店を閉店し，1996年にはバディリ本店を残すのみとなった。

追いつめられたサイモンは翌1997年，一か八かの博打を打つこととなる。1997年，第5回総選挙への出馬である。ただし，恩人のアンソニー・テモに遠慮して地元インボング選挙区から出馬せず，ポートモレスビー東北選挙区に立候補した。サイモンは蓄えていた金の中から60万キナ（日本円にして7500万円）を投じ，インボングの地からも若者達を動員して華々しい選挙キャンペーンを行ったが，所詮は地盤を持たない移住民であったため，4位に終わった[18]。

こうして，サイモンの賭けは裏目に出て，回転資金を失ったサイモンは1998年，ついに古着ビジネスから撤退する。サイモンの古着屋で働いていたアンブプル村の若者達は櫛の歯を挽くように結婚して一家を構えるため，村に帰って

行き，1999年，キンジャロもアンブプル村へと戻っていった。村を出てから12年の歳月がたっていた。

この年，パプアニューギニア全土では，2000年終末説が大いに流布し，各地の教会で改悛の熱狂がくり広げられた。中には，公務員や企業のホワイトカラーの地位を捨て，出身村へ帰る者もあった。故郷で親族とともに世界の終末を迎えるためである[19]。

2000年，世界が終末しないことが徐々に明らかになり，世情は静まっていった。この年，キンジャロは結婚する。

また，この年，ナウリガイ氏族のヌーメン・ナレがポートモレスビーからアンブプル村に帰村し，ペンテコステ派の教団,「リヴァイヴァル・センター」の教会をカリリポイの丘に建てた。バイブル・チャーチの信仰の生ぬるさに不満を感じていたピンジェやマタやパンジポは「リヴァイヴァル・センター」に入信し，名前をブラザー・フィレモン，ブラザー・マチュー，ブラザー・ポールなどと変えていった。

キンジャロに最初の子供が生まれる。父のあだ名に因んで，ボス・アペと名付ける。

2003年，キンジャロ，大病を患い，リヴァイヴァル・センターに入信，名をブラザー・イソと名乗る。

キンジャロの説教[20]

1．回心と奇蹟

前は，俺はビンロウをかみ，タバコを吸い，けんかをし，ビールを飲み，色々なことをしとり回っとった。

2003年，俺は病気にかかった。タイフォイド・マラリアや[21]。ほんで，すん

での所で死ぬとこやった。ほんで，俺は寝床についとった。そこへ，一つの考えが俺の頭に浮かんだ。

俺の家は隠れた場所でも，村の外れでもなかった。それはアンブプル・ペナ（大広場）に面して立っとった。

それで俺のクラン，カリやマッキンジェやら，俺のこの家族が行き来しとった。そやのに，連中は俺の見舞いに来んかった。

そこで俺はあれやこれやと考えた。俺の直のクランやのに連中は俺を見舞いに来ん。ほんで大きな病気が俺を捕まえて，もうじき死にそうやのに，何で連中は俺を見舞いに来ん？

こういう考えが俺の頭に浮かんだんや。

俺は寝床に横になって考えとったが，一つの考えが俺の頭に浮かんだ。

その考えはこうや。俺の知っとる小っちゃいグループが戦いに勝つ。そやからおまんはこの小さなグループを見つけないかん。

この考えが俺の頭に浮かんだが，俺はこれをいったい何やと思った。

ほんで俺は教会の方に考えを向けた。

よっしゃ，どの教会が大きいか，俺は教会を次から次とチェックしていって，そうや，リヴァイヴァル・センターが小っちゃい教会や。

よっしゃ，俺はこの教会をマークした。バイブル・ミッションは近くにある。カトリックの衆も近くにおる。大きな教会は近くにあるが，その連中は俺を見舞いに来ん。

この考えが俺に訴えたけん，俺は女房に言うた。「リヴァイヴァル・センターの衆が道路に立っとる。頼む，連中を連れてきてくれ。もうすぐ俺は死ぬ。そやから，連中に俺のことを祈らせて，俺は死ぬんや。頼む，急いで行って，連中が俺が祈るんを助けるようにさせて，俺は死ぬ。」俺はそう言うた。

俺に病院に行く金はない。ブタも持っとらん。そやから，連中に祈ってもろて，俺は幸せに感じながら死にたいんや。

よっしゃ，俺の女房は俺の手や脚が震え，心臓がパンパンパンパン激しゅう動悸を打って，俺がもうすぐ死ぬとこを見て，教会まで走って行ったんや。ほんで，ブラター・マチュー（マタの洗礼名）を見て，一緒に連れ帰ってきたんや。リヴァイヴァルの衆4人が道に立っとったんや。

俺は連中を家ん中へ入れた。ほんで連中は俺のために祈った。ほんでこう言うた。「兄弟，洗礼せえ。神がおまんの罪を取り除いてくださるけん。神はおまんに聖霊を与えてくれ，異言がおまんの口からあふれ出て，この病気は完全に治るけん。」

そやけど，こういうたぐいの話は前に聞いたことはなかった。俺は信じんかった。「よっしゃ，おまんら祈れ」と俺は言うた。「もうすぐ俺は死ぬけん，お祈りだけが欲しいんや。そやから，おまんら，祈れ。」

よっしゃ，連中は祈った。連中は祈って，俺にたずねた。「明日，俺らはもう二回祈りに来るけどええか？」

俺は言うた。「よし。このことでは，俺は同意や。おまんら，二遍やって来い。」

それで翌朝，連中はまたやって来た。ほんで聞いた。「おまんは病気で床についとる。ゆうべ，俺らは祈っていったが，おまんの体になんか変わりはなかったか？」

俺は言うた。「いいや。同じ病気がまだついとる。」

連中は言うた。「もう一遍，祈るぞ。」

「よっしゃ。」俺は言うた。「俺はお祈りが好きやけん，おまんら祈ってええぞ。」

ほんで，連中は祈ってから俺に聞いた。「おまん，洗礼受けえ。おまんの病気は治るぞ」ゆうて。

そこで，俺はあれやこれや考えた。「俺が洗礼したらビールは終わりや。ビールをやめる。洗礼したら，女との色事も俺はやめる。洗礼したらタバコもやめ

る。洗礼したら，着飾って踊るんも終わりや。洗礼したら悪口もやめる。洗礼したら，そうしたこと全部やめる。俺の命はまだ若いのに。」俺はあれこれ考えた。俺は洗礼できんかった。

俺はそう考えはしたが，「病気は言うこと聞かん。病気は大きゅうなっていく。お祈りは助けにならん。病気はどんどん進んでいって俺の命はなしなってしまう。」と思うた。

そやって考えて，また二遍お祈りしたが，お祈りは助けにならなんだ。もうすぐ俺は死んでしまうが，俺には俺の病気を治してくれる薬を手に入れるために病院に行く金はない。そやから俺は罪人や。悪口言うたり，色んなことを俺はやった。俺は罪人や。教会行っとる連中や牧師は神の言葉を口にする。ほんで「2つの場所がある。天国と地獄や」と言う。

ほんで俺は思うたんや。「俺が死ぬ前にまず洗礼せないかん。それから，俺は死んでもええ」

そういう考えが起こったんや。

ほんで俺は男衆に「俺は洗礼するぞ」言うたんや。俺は洗礼するゆう決心をしたんや。

オーケー。教会の衆はポンボウの川のそばに池がある。そこへ俺を連れて行った。

俺は二本の杖をついとった。何もなしでは歩くんが難しかったけんや。俺はこうやって杖をつき，ゆっくりゆっくり進んでいき，池に着いたら，連中は俺を洗礼したんや。

連中は手を俺の頭の上にかざして，牧師がなにやら別の言葉で祈った。この言葉が俺んところへ飛んで来た。ほんで，牧師が「アーメン」言うて，俺の手を握ったんや。牧師は俺を水の中に立たして言うた。「歩け」

それと同時に，俺の病気は去っていった。俺は体が重いと感じとったんやけど，その時，体が軽うなったんや。

病はいえた。体の異常は去っていった。

教会の衆が俺が洗礼するのを見とったが，俺は連中に「神に祝福あれ！神に祝福あれ！神に祝福あれ！」と叫んだんや。

Ｆ：誰が洗礼したんや？[22]

キ：教会の頭や。ガブリエル・ニニンギゆう。

Ｆ：コレ・ペライエ氏族か？

キ：いや。コアンギリの男や。カウリェンゲ[23]の教会を主宰しとんや。

ほんで，今や，病はいえ，それと同じ瞬間に，俺はうれしゅうてたまらんようになったんや。

病はいえた。重荷は去って行った。

俺はうれしゅうて，フィレモン（ピンジェ）のうちへ行き，フィレモンはひげ剃りで俺の髪，ひげを全部剃り落としたんや。ほんで，俺は水浴びした。

その日に，俺は一本の大きな木を森から運んだんや。

アンブプル・ペナ（大広場）に立っとった衆は俺を見て，「えい！病人が大きな木を運んどるぞ」というて，驚くまいことか！

俺は言うてやった。「俺が教会に入ったら，俺の病気は今日終わったんや！」

ほんで，それと同時に，タバコの味がせんようになったんや。俺はタバコを吸いとうなくなったが，それは自然にそうなったんや。ほんで，悪い事，俺がしとった悪口は，その時，俺の口が閉ざしたんや。俺がしとった他のことも全部，洗礼した時に，閉ざされたんや。古いやり方は自然に閉ざされたんや。

ほんで，俺は教会に通うようになった。教会に通い，通い，通いしとったら，俺に初めての大きな勝利が来たんや。

クメ[24]で大きな木が，トタン屋根の上に倒れて，二人の子供が死んだんや。その同じ夜，アンブプル・ペナにも雷が落ちて大きな風が吹いて，木が今にも倒れそうなんや。俺はかやぶき屋根の家に寝とった。洗礼してから二週間たった頃や。

「えい！」俺は思うた。「何が何しとるんや。広場の立ち木全部倒れて，俺らを殺すんやないか。」

おれはあれこれ考えとったが，一つの考えがやってきて，こう言うた。「異言で祈れ！」ゆうて。さあ，俺は祈った。祈ったらあの大きい風がその瞬間に止まったんや。

ああ，そうか！俺は今や見つけたんや。この祈りにはパワーがあることを。これが一番目に俺が見つけ出したことや。

二番目は，俺の女房が産気づいて寝とった時，俺が祈った時，神の霊が俺にこう言うたんや。「女房に川へ行けと言え」ゆうて。

俺は口を開いて「おまん，川へ行ってこい」と言うたんや。

女房は「いやや」と言うた。「まだ暗いわ。真夜中やないの。うちはよう行かんよ。」と言うた。

俺は言うた。「おまんは神の霊の言葉に抗うたらいかんぞ。神の霊が俺に言うたんや。起きい！」

女房は言うた。「真夜中やから，うちら一緒に行こ」そう言うたんや。

俺は言うた。「いや。息子はまだ小さい。息子が起きて，俺らをさがそとしたら，炉の中に落ちてしまう。俺は息子の番をしとる。おまん何事にも恐がるな。ゆっくり，川へ行け」

ほしたら，女房は言うた。「わかったわ。」

女房はそーっと，そーっと川へ行って，そこで赤ん坊が産まれたんや。女房は赤ん坊を抱いて帰った。

ほんで俺は言うた。「おお，神よ。俺は感謝申し上げます。あなたは俺の祈りに応えてくださり，女房に川に行くよう告げてくださいました。感謝申し上げます。」

俺は二番目の奇蹟を目にしたんや。

そやって，他にも，ブタのことで祈ったんや。

俺がこの丸い家を建てた時，俺は一頭のブタも持っとらんかった。

ほんで，俺は神に祈ったんや。「神よ！食べもんをお与えくださるのに感謝申し上げます。そやけど，ブタのための食いもんを俺はむだにしております。俺は二頭のブタが欲しいです。」俺はこう神に祈ったんや。

ほしたら，俺が頼んだわけやないのに，ブタが二頭手に入ったんや。

「ああ，そうか！」さあ，俺は見つけ出したんや。「祈りにはパワーがある」ゆうて。何を俺が頼んでも，次々と実現するんや。俺はこのことを発見した。

俺はそやって暮らしとった。教会のお勤めしとった。８ヶ月が過ぎた。地区の牧師らは，俺が教会の世話をするんに誰より一生懸命なんを見とった。ほんで牧師らは言うた。「わしらはおまんを助手にする。」俺を助手に任命したんや。８ヵ月後に。

俺は礼を言い，助手の地位についた。ほんで，助手の仕事を始めた。神の言葉，バイブルを声に出して読む。別々を俺が読む。祈りを始める。祈りを閉じる。そういうことを俺はしとった。

そうしたことを俺は６週間もしとったやろか。牧師らは俺を牧師に指名しようとした。

俺は学校へ行ったことのない人間や，バイブルも長い間読んだわけやない。そないなことを俺はあれこれと考えた。ほんで，俺は神に祈った。「あなたの仕事を牧師らは俺に与えようとしとりますが，俺は学校に行ったことがないことは，あなた自身がご存知です。俺は村の男です。あなたの言葉はほんまに深うて，俺には十分に説明することができません。牧師の仕事につくことはお断りします。３年後には，あなたの仕事（牧師）をお受けしますけに。」俺はそう言うた。

それは誰も見とらんとこで，俺だけで祈った秘密や。

ほんで，牧師らはこの地位を延期にした。

ほんで，俺は言うた。「神よ，ありがとうございます。あなたは俺の祈りに

応えてくださいました。」

こうして，また教会の助手の仕事をしとった。そのうち，牧師らは3年の途中で俺を牧師に指名しようとした。俺が期限を切ったのは3年後や。ほんで3年はまだたっとらんかった。その途中で牧師らは俺を指名したんや。俺は「だめや」言うた。

よっしゃ，牧師らは二遍，俺を指名した。ほんで俺は「だめや」と言うた。三遍目，俺は「だめや」と言うた。四遍目も「だめや」と言うた。

今年（2006年），たぶん1月かそこらに，牧師らは俺を指名しようとした，3年目が来たんや。俺は「だめや」と言うた。俺は「だめや」と言うた。

今，神の霊は俺に仕事をさせたがったのに，俺は断り，断り，断り，断りした。そやから，初めは，神の霊は俺に働きかけとったのに，その時，切断された。神の霊は御自身で来られるんや。そやから，俺が祈っても俺にもはっきりせんようになった。俺が頼むことに，応答がなしんなったんや。ほんで俺は幸せに感じんようになったんや。

ほんでもう一つ，重荷（苦労）が次から次へ出てきたんや。苦労が次々とやってくるけど，俺は苦労に調子を合わせることができん。苦難を抜けるんがほんまに難しゅうなったんや。

オーケー。そやから，俺は大っきょい誤ちをやってしもたんや。神の仕事を断るゆう。

そやから，俺は言う「まず，なるようになれ。」ほんで，俺は神に謝った。将来，仕事を引き受けますゆうて約束して。

そう口にして，俺は教会を続けとんや。

2．神の祝福の法と贈与

祝福は人間に現れる。祝福を，いつも俺らはもろうとる。

シオタ，おまんが政府のために働き，政府がおまんに金をくれとんのも，神の祝福がおまんに来とるわけや。

俺らが村に住んどってサツマイモを植えとるが，俺らは丸うて長いサツマイモの実を地中に植えとるわけやない。俺らは葉っぱだけを地中に植え，神の祝福がサツマイモを与えてくれるわけや。神の祝福が俺らに水をただでくれとるわけや。俺らは何一つ買うわけやない。それは神の祝福や。

食いもんも，俺らは葉っぱや種を植えとるだけや。そやけど，食いもんは中に眠っとる。それも神の祝福や。

そやから，もし，この神の祝福がおまんに与えられ，おまんがそれを手にしたら，おまんはそれをいろんな人に分配せないかん。教会へ行っとる者にも，行ってない者にもや。

教会に行っとる者も，行ってない者も神が創造し給うたんや。そやから，おまんが連中を助けたら，神はそれ以上におまんに与えてくださる。おまんがそれを手にしたら，もっとようけ与えるんや。もっとようけ面倒を見てやるんや。

祝福の道ゆうんはそういうもんや。

おまんが地上で閉ざしたら，神は天国で閉ざし，おまんは大きな祝福を手にすることができんのや。おまんが地上で食いもんを失くしたら，神の祝福がおまんにより一層与えられるんや。おまんに一層注がれるんや。

おまんが手に入れたら，いろんな人々に分配するんや。いろんな人々に分配したら，よっしゃ，人々はおまんにもっと与えてくれるやろ。

祝福の法っちゅうのはそういうことや。

神の魂が俺らを面倒見てくれとるんや。

俺らが手足を赤ん坊の体の中に入れるわけやない。俺らが目を赤ん坊の中に入れるわけやない。

神が創造されるんや。神が創造主なんや。

神が創造され，俺らの世話を見てくだされるんや。それが神の魂なんや。神

が俺らに祝福を与えてくださり，面倒見てくださるんや。神の祝福が俺らに食いもんを与えてくれて，俺らが魂を養うようにしてくださるんや。何であれ食いもんを神の魂が俺らに与えてくれ，俺らは神から賜った魂を養うんや。神の道とはそういうもんや。

もし，おまんが分配することをせんかったら，神はお返しをしてくれんやろう。神は与え給う。おまんが分配するに足るもんを。もし，おまんが他人に分配せんかったら，神はおまんを祝福されんやろう。

おまんが人々にようけ与えたら，神の祝福はおまんにようけ与えられるやろう。どういう祝福であれ，そういうもんや。

ほんでマロワ[25]が言うたんも同じ事や。オーケー，マロワは言うた。

「このちょっとばあの金を手に入れたら，俺は人々に与える。よっしゃ，俺が人々に与えたら，人々はそれ以上に与えてくれる」マロワは人々の魂の，神の魂の世話をしとる。

ほんで，マロワは人々に与える。よっしゃ，人々はそれ以上に与える。もし，おまんが神に与えんかったら，人々を助けんかったら，神は祝福を閉ざされるやろう。

そやから，バイブルはこう言うとる。「神は鳥の面倒を見られとる。そやから，何で神は人間の世話を見んことがある？」

鳥は動物や。ほんで，俺ら人間は動物以上のもんや。人間は神の魂や。そやから，神の魂は俺らから去ってはいかん。神の魂は毎日おまんに食いもんを与えてくれる。どんな人間にでも。

俺がどこへ行こうと，俺は物を買うことはない。父なる神が支給してくれる。父なる神がそこの人間に考えをお与えになる。ほんで，そこの人間は食いもんをただで俺に与えてくれる。神が支給してくれるんや。

３．神の時代と聖霊の時代（モーゼとキリスト）

祈りに応えられる時，バイブルはこう言う。「お前が祈る時，お前の考えは海の波のようであってはならぬ。行ったり来たりしてはならぬ。祈る時には同時に二つのことを考えてはならぬ。三つのことを考えてはならぬ。それは，神が三人ではなく，三つのことに同時には答えられないからである。神は一人である。それゆえ，お前が一つのポイントを持ち出せば，神は応えられる。祈りの道とはかようのものである。」と。

ほんで，人間の中には，あんまり自由でないもんもおる。連中の考えは海の波みたいなもんや。連中は何も手にできん。

俺が教会行っとった頃は，俺は神のなさったたくさんの奇蹟を見た。俺が祈る時，俺は信じとった。俺は願いをかなえられるやろと。それは一週間や二週間後に自動的に実現するんや。

そやから，何にせよ俺が祈る時は俺は信仰（faith）とともに祈ったんや。

ぎょうさん，俺は発見したんや。ほんまにぎょうさん。

一つ，おまんに教えたろか。―テモテ２の11行にこうある。「女性は完全な従順をもって，静かに教えを学びなさい。女性が教え，男性の上に立つことを，わたしは許しません。」ゆうて。女が教えることも誤ちや。

神の律法，アンボ・ルートも言うとったが，十戒の第一の律法は，「おまん自身を好くように，他人も好きになれ」バイブルはそう言うとる。そやから，俺らが，他の誰ぞを好かんようになって，陰口を叩いたりしたら，俺らはこの法を破るわけや。俺らは神の律法に従わんわけや。

ほんで，ぎょうさん，ぎょうさん，誤ちがあるわけや。不倫もそうや。バイブルは亭主が死んだ時だけ，女房は結婚できる言うとる。ほんで女房がなしんなって，亭主が一人んなったら，他の女と結婚できるとバイブルは言うとる。

そやけど，おまんが二人の女と結婚したら，おまんは不倫を行うたわけや。そうバイブルは言うとるわけや。そやから，昔，旧約聖書の頃は，預言者の中には，女をぎょうさんめとったもんもおったが，それは昔の事や。神の時代の事や。

ほんで，イエス・キリストが降りて来て，戻っていかれた後は聖霊の時代や。イエス・キリストが天に戻られようとして，連中がイエスを殺した時，イエスは聖霊を地上に送り降ろされたんや。

昔は神の時代で，神はモーゼと直に話をされたわけや。それは昔の話で，それが旧約聖書のことや。

それが後んなって，モーゼの言葉を信じん人間が出てきた。連中は悪事や何やらをした。そやから，多分，そういう連中も自分の目で見たら信じるやろと神は思うて，イエス・キリストをマリアの腹ん中に降ろしたんや。聖霊によって妊まれて。それが俺がバイブルで見たことや。

ほんで，イエス・キリストが生まれた時，星がベツレヘムの上に止まったわけや。そやから，全ての人間がそれを見て，その時，イエスを尊敬し，大いなる時代にイエスは来て，病人を治したりするゆう奇蹟やらの仕事を始めて，教会をスタートさせられたわけや。

ワイン，新しいワインや。古いワインを皆が婚礼で飲んで，途中で足らんようになった時，イエス・キリストは初めての奇蹟，新しいワインを作ったわけや。その意味は古いワインが終わって，新しい契約が現れたわけや。それがイエス・キリストの側や。古いもんは終わった。モーゼの側は終わった。こうして，イエスは模範を示されたんや[26]。

ほんで，それが新しい契約や。昔は古い契約やった。それで，それは旧約の側にあるんや。イエス・キリストが死なれた時，イエスの血が俺らとの間に新しい契約をつくられたんや。俺らの中に。俺らはイエスの血の中に入る，というのは，イエスの血が俺らの罪を洗い流してくださるんや。今や，俺らは自分

が犯した罪から自由んなる。洗礼の水が運んでいてくれるんや。イエス・キリストの血が俺らを洗い，俺らは清らかな人間になり俺らの腹（心）は清らかんなるんや。

神は聖霊を与えてくれる。ほんで，この時，聖霊が俺らを導いてくれ，聖霊が俺らの舵取りをしてくれ，聖霊が正しい道だけに俺らを操縦してくれるんや。そやから，俺らが天国に昇って行くんも，何の導きもなしにやないんや。聖霊が助けてくれて，俺らをつかまえて行ってくれるんや。

そういう具合んなっとって，教会の話は，他の教会も同じや。そやけど，バイブル・チャーチの連中は隠しとる。連中は隠して，信者に言わんのや。もし，連中が信者の男女に肉を食うんはタブーや言うたら，ブタ肉は信者の男女の中心になる食いもんやから，教会はおしまいや。そやから，連中はこのことを隠しとんや。連中は信者の衆には言わん。ほんで信者の衆は肉を食べ続けとんや。そやから，バイブル・チャーチは誤りを犯しとる。これはバイブル・チャーチの牧師らの誤りや。牧師らが信者を誤りに導いとる。誤りは牧師らにあるんや。

4．この世の成り立ちとイエスの犠牲

パプアニューギニアでは，俺らは様々な悪事を見とる。というのは，神は俺らを創造されたんとちゃうんや。

バイブルは白人のことをジュダ（ユダヤ人）と呼んどる。ほんで俺ら肌の黒いもんのことをジェンタイル（異邦人）と呼んどんや。ジェンタイルゆうんは外側の集団ゆう意味や。ジュダは宮殿の内側や。

そやから全ての白人の男女は神が創造され，皆，正しいことまちごうたことを見分けることができ，まっすぐなことだけを行う。連中はええ考えをうまいこと配分する。連中は自動車をつくり，飛行機をつくり，空中を高う飛び，海には潜水艦をつくり潜らせる。神は連中に知（サベ）[27]をお与えになったんや。

連中はこの知を使おて，飛行機や何やかやをつくったんや。

初めに，連中は知をどこから手に入れた？それは，神が連中を創造され，神が連中に知を与えたんや。そやから，連中は全てのもんをつくったんや。

俺らは外側の集団，ジェンタイルや。そやから神は俺らに教えてくださらず，神は外側の衆は動物の面倒を見るように定められたんや。俺らジェンタイル，俺らが動物の面倒を見るために現れたんや。蛇，鳥，どいな種類の小っちゃい動物，大っきょい動物も俺らが面倒見るように定められたんや。俺らは動物と一緒に寝とる。ブタと一緒に寝とる。犬も一緒に寝とる。猫も一緒に寝とる。どいな動物とも一緒に寝とる。それは俺らが動物の面倒を見るからや。

俺らの考えは動物並や。動物の考えが俺らの考えや。そやから，俺らは正しいこととまちごうたことを見分けることができんのや。

尊敬ゆうもんがないんや。それはこうしたわけ，俺らがジェンタイルやから，俺らは動物を見，こういう理由で，俺らパプアニューギニア人はええ考えを配分することができず，神は俺らに知を与えてはくれず，俺らは何一つつくり出すことができんかったんや。

学校を出た人間やパイロットらも白人が教えたんや。白人の知で，連中は地位についたんや。ラジオやて，連中自身では一個も機械をつくれんかったんや。知は全部白人から手に入れたんや。俺らパプアニューギニア人だけでは一つも作ることができんかったんや。俺らの考えは動物と一緒や。昔からそうやった。そやけど，白人が来て，俺らの昔の側は戦うことばっかりや。動物の考えは残っとって，俺らは兄弟やとか，一つの集団やとか考えとらんのや。

動物の考えが残っとって，戦さばっかりや。こういうことをしとったんやけど，今，白人がやって来てそれを止めた。ほんで，白人は白人の流儀を俺ら，外側の筋のもんに教えた。俺らが盗みをするんは，神が俺らを創造しとらんからや。神は白人を創造し，支えとるから俺らはええ知識を持っとらん。そやから，俺らは盗んだり何やかやするんや。

イエス・キリストを連中が殺して，イエスが死のうとする時，イエスはこう言うた。「私はシティの中では死ぬわけにはいかぬ。」イエスはそう言うてシティの外の山のようなとこで死にたいと思たんや。イエスはゴルゴタの山で死んだんや。

その意味はこうや。イエスは外側の筋のもんのために死んで，血が流されたんや。そやからイエス・キリストの血だけがギリシャ人やジェンタイルの道をつくったんや。道をつくってくれたけん，俺らは教会に行っとんや。

もし，イエス・キリストがシティの中で死んどったら，どうやって外側の筋のもんはイエスが死んだっちゅうことがわかる？イエス・キリストの血だけが俺らを見つけ出し，俺らを集めたんや。バイブルは俺らジェンタイルのことを天国に選んどらんのや。ジュダの筋のもん，14万4千人だけが指名されて新しい歌を歌いながら神の王国に入って行くんや。バイブルはそう言うとる[28]。

そやから外側のジェンタイルは選ばれとらんのや。

そやから，俺らの行いの第一は信仰や。信仰が一番目や。まず，改心して，洗礼受けて，教会に行く。これが一番目や。二番目が祈りや。三番目，皆が律法に従わなんだらならん。俺らパプアニューギニア人，外側の筋のもんは。俺らは律法に従わん。そやから外側や。神のほうに従わんもんは罪を得る。

5．罪と律法

そやからバイブルは大きい罪やとか小っちゃい罪やとか言わん。小っちゃな罪も大っきょい罪も罪は罪や。おまんが人を殺すんも罪や。うそをつくんも罪や。盗みも罪や。誤ちのあるもんは何でも罪や。そやから罪は罪や。

神の法は，おまん自身を好きなように，他の人間も好きんなれと言うとる。自分だけを好きんなったらどうなる？多勢の人間が敵，敵，敵，敵，敵，小っちゃい敵，大っきょい敵。

神の法の一番目は「おまん自身のように他の人間を好きんならないかん。」や。

そやから，俺らが嫌いおうて敵同士になったら，罪があるんや。

ほんで，悪口言うんも，罪をおまんが報告しとんや。

他の罪を犯しても，おまんは罪を報告し，報告し，報告し，報告し，報告し，そやって，おまんは死ぬ。ほしたら，報告が出て来る。報告が次々に現れ，火に墜ちる。

そやから，俺らパプアニューギニア人，いやパプアニューギニア人だけやない。日本人も，バイブルは指名しとらんのや。

そやから，俺らには信仰と行動が必要なんや。その二つだけが俺らを天国へ運んでくれる。

信仰だけでは十分やないんや。言葉を信じとったら，天国へ行けるか？そうやない。信仰の世話をせんからや。信仰だけではなにがいかんのか，おまんに説明したる。

モスビーは罪人や。そやけど奴は神はおられること，イエス・キリストは（犠牲になって）死なれたことを信じとる。そやけど，それはおまんを天国に連れていかん。罪が残っとるやないか。わかるか？

信仰だけでは働きをせんのや。サタンかて，信じとる。姦淫しとる衆かて，皆，イエス・キリストは死なれたことを信じとる。

おまんは律法に従わならならん！

罪人かて信仰することはできる！

今，売春宿におっても，明日は信仰することはできる。そやけど，罪は残るんや。信仰だけでは十分やないんや。おまんは信仰することはできるけど，神の法に従わなならんのや。

人間は信仰することはできる。そんなら，まっすぐ進め，神のまっすぐ（正しさ）に全部従え。神のまっすぐ。それは十の律法（十戒）や。神が与えられ

た。そやから十戒全部を神は見張っておられる。そやから，おまんは十戒に従わんならん。五つに従ごうて，五つに従がわん。それではいかんのや。

大っきょい罪，小っちゃい罪，罪は全部，罪や。罪は罪や。

罪を犯すたびに，おまんは報告しとんや。一つ一つの罪をおまんは報告しとんや。報告して，報告して，報告して，報告して，報告して，どやって，おまんはその全部の罪から逃げられる？おまんは教会に行ってしもとる。洗礼してしもとる。ほんでまた罪を犯した。どやっておまんは罪から脱けられる？

Ｆ：わからんわ。

キ：モスビー[29]，あいつには脱けられるチャンスがある。ちゅうのも，あいつはまだ洗礼してないからや。

バイブルには，ペトロの手紙―３の21や，そこには言うとる。神御自身で言われとる。「私は水で人間から罪を除く。」ゆうて。ほんで，「私は洗う，体の外側の汚れではなく，内側を洗う」と言われとる。内側は内側や。罪を洗うんや。ほんで罪は消えるんや。

神がおまんを洗うてすんだら，いつまでも，おまんは白いままでおらんならん。白いままでおって，おって，おって，おまんは清らかでおらんならん。おまんは洗礼を受けて罪を除いてすんだんやから。

バイブルはこう言うとる。「私は水で人間を洗う。私は内側をきれいにする。罪をきれいにする。」バイブルは罪について語っとんや。バイブルは言う。「私は手を洗うのではない」これは，神は水で人間を清められるゆうことや。水で，神は人間の汚れを洗われる。罪をや。モスビーはようけ罪を犯しとる。そやけど，あいつが洗礼を受けたら，その罪は全部終わるんや。

もし，モスビーが教会の人間でないなら，罪がある。ほんで，教会の中に入ってきて，教会があいつを洗礼したら，あいつの罪はなしんなる。

前には人間は皆，罪を犯しとった。そやけど，一旦，おまんが洗礼受けたら，罪を水が運び去る。この時，おまんは清らかんなる。そやけど後で，おまんが

小っちゃい事，誤ちを犯したら，誤ちは報告するんや。誤ちは罪を報告するんや。ほんで後で請求書が来るんや。請求書はおまんに罪の報告を見せるんや。「私はお前を洗礼してやった。お前を洗ってやった。だが，お前は再び報告した。お前の罪を。お前の誤ちを」

信心，誰でも信心はできる。バイブルは遠の昔に現れた。30年か50年か60年か，バイブルはほんまに昔に出来たんや。神の言葉は遠の昔にやって来た。そやけど人間はそれに従わんかったんや。

稀にそっちに一人，こっちに一人ゆう具合に，純粋に清らかな人間が神の法に従ごうとった。

信仰だけでは十分やないんや。信仰は罪人でも信心しとる。誰もが信心しとる。バイブルはほんまに昔に出て来て，神の言葉は誰もが聞いとる。聞いて，聞いて，聞いて信じとるんや。

信心して，洗礼受けて，人は純粋に清らかになるんや。混じり気なしの白，ピュアー・ホワイト，ピュアー・ホワイト。こうした人間が神の王国を手にするやろう。神の王国は混じり気なしの純粋な白や。小っちゃな汚れさえあったらいかんのや。ほんまに清らかな，ほんまに白い人間だけが神の王国に行くんや。

他の教会ゆうたら，小っちゃな罪，小っちゃな罪があふれとる。ほんで，自分は教会や言うて嘘を言うんや。自分は教会行とる，行とる，行とるゆうて。連中は上っ面だけ教会をしとんや。

連中は罪を重ねとる。1，2，3，4，5，連中は罪を重ね，上っ面だけ教会行とる，行とる，行とるゆうが，内側は罪を重ねて，報告し，報告しいしとる。神の法に従ごうて，信心しとる人間だけが清らかなんや。神の王国ゆうたら比べるもんがないくらい清らかなんや。そやから，こういう混じり気なしに白い人間だけが神の王国に入れるんや。

小っちゃい罪が一つでもあったら，この小っちゃいんが請求するんや。おま

んの報告にこたえて請求するんや。

バイブルは言うとる。「人が罪を犯したら，その者はもっと犯す。」容易やないんや。ぎょうさんの罪をよけて，たった一つ小っちゃい罪を犯す。ほんで，おまんは神に不平を言う。「ヘイ，ゴッド，俺はぎょうさんの罪をかわして，小っちゃい罪一つだけが俺に当たったんや。」やが，神は言う「罪は罪や。」俺が言うたやろ，バイブルは「罪は罪や」と言うとんや。小っちょうても，大っきょうても，罪は一つなんや。

Ｆ：ティペ・コンブ(30)。

キ：ティペ・コンブや。混じり気なしに純粋に清らかな白い人間に神は言う。「お前は私の法にすべて従った。」

重荷（苦労）が来る，問題が来る。悩みが来る。いろんなことがやって来る。おまんは重荷を背負う。

もし，おまんが清らかなら，おまんは重荷から自由んなる。

おまんがブタを殺したら，下に落ちる。

ここでは，地上では，姦淫の風習が風靡しとる。

「ここでは，地上では，俺は幸せやあ。」

そやけど，おまんは重荷を背負う。おまんの地上での幸せは終わる。おまんはもう幸せやない。

バイブルはそう言うとる。

あらゆることでおまんは律法に従わなならん。十戒の二つか三つでも破ったら，罪はそれを報告する。罪は残る。大っきょいことや。

ぎょうさんの言葉がバイブルにはあって，人間に挑んどる。ぎょうさんの言葉や。ぎょうさんの言葉や。難しい，難しい言葉がある。そやから，俺らは手本に全部は従わん。いくつかには従う。いくつかには従わん。

イエス・キリストが死んだ時，こう言うた。「私は大きな十字架を背負おう。そして，小さい十字架を残して行く。お前達が背負うのだ。私が背負ったよう

に。お前が背負わないというなら，手ぶらで行くというなら，よろしい。後になって大きな重荷を背負うことになろう。

今ここで，お前が自由なら，後でお前は苦しむことになるだろう。ここで背負うなら，後にお前は楽をするだろう。」

イエスはそう言うたんや。

イエスは十字架について言うたんや。「重荷が来るであろう。問題が来るであろう。だがお前はひるんではならない。背負え」言うて。

「ひたすら背負え，背負って歩め。歩め，歩め，歩め」そう言うたんや。

サイラス・マロワも話しとったやろ。「重荷が来ても，問題が来ても，立って行け」言うとったやろ。

律法は一つ所にあるんやない。ある律法はこっちにあり，別の律法はあっちにあり，別の律法は別ん所にあり，それを俺は全部集めて律法にしたんや。

創世記から黙示録まで集めて，集めて，集めて，初めて律法は完成するんや。

判決はこの地上の人間がするんやない。神がなさるんや。

そやから，「お前達はよく見て按配せよ」と言うとる。バイブルは「按配するのも，たくさんの霊がいる。それゆえ，それらの霊をよく按配せよ。」と言うとる。

神の霊も言うとる。「霊はたくさんある」言うて。

サタンにも何千人もの天使がついとる。

モ：イエ・ケリ（悪い奴）。

キ：そやから，ある男が死にそうになって言うんや。「おお，そうや。俺には光が見える。」明かりのようなもんや。それも，サタンがおまんをだまそとしとんや。サタンはおまんをサタンの教会に入れよとしとんや。サタンはおまんの教会を盗もとしとんや。

バイブルはこう言うとる。「サタンは昔，神の天使やった。そやけど，奴は神にとって代わろうとした。神は言われた。『天使よ，去れ。私はお前を創造

した。だが，なぜ，お前は私にとって代わろうとするのか。去れ！』」

神はサタンを地上に追放されたんや。そやから，サタンは何千人もの天使と一緒に来たんや。何千人もの天使が一緒におるんや。

そやからサタンは人間という人間をたぶらかすんや。

6．異言のパワーと666

教会ん中には異言をしゃべったらいかん，禁止やいう教会もある。そやけど違うんや。そう言う教会は嘘を言うとんや。

コリント前書14の2から5までに，バイブルは言うとる。「全員，異言で語るべし」ゆうて。そやから「異言をしゃべるんは禁止や」言う連中は嘘言うとる。

コリント前書14の9には言うとる。「地上の誰も異言を知ることはできない。だが，神御一人ばかりは聞き分けることができる。これは神への秘密の言葉なのだ。」ゆうて。

そやから，サタンの何千人もの天使も異言は知らんのや。そやから，連中は異言をブロックすることはできんのや。異言は神に直に伝わり，神御一人がそれを知っとられるんや。

ヨハネ福音書20にも言うとる。聖霊の力が異言を隠れてつくるんやゆうて。聖霊の力が異言をつくって，これを神御一人が聞き分けることができるんや。

連中が異言はタブーや言うとるんは嘘や。もし，誰ぞ牧師がタブーや言うたら，俺はその牧師に聞いたる。「それはバイブルのどのページにあるんや。教えてくれ。」ゆうて。牧師は何も言えん。バイブルは言うとんや「全員，異言で語るべし」ゆうて。

おれはバイブル・カレッジやゆうとこには行っとらん。そやけど，俺は聞くことができるんや。「どいよなバイブルにのっとんのや？バイブルは俺も見る

ことができるけど，どこにのっとんのや？」そうたずねるんや。

バイブルはそななこと言うとらん。バイブルが言うとんのは「全員，異言で語るべし」ゆうことや。ほんで他んとこでは「聖霊の力が言葉を異言にする」と言うとんや。

俺はどこの学校にも行とらん。そやけど，神は俺の目を開きたまい，神の言葉を見て知ることができるようにしてくれ，その意味を案配する力を与えたもうた。

神の言葉の意味を案配して，俺は知った。「おお，そうか。これの意味はこうで，これの意味はこうで，これの意味はこうで」ゆうて。

俺はどこのバイブル・カレッジにも行っとらん。俺はどこの学校でも勉強しとらん。誰一人，牧師は教えてくれんかったし，どこの学校も俺を教育してくれんかった。

そやけど，おれはバイブルで見たんや。そこにはこう言うとる。「盗人はもうやってきた。」それはヨハネ福音書10の8や。「盗人はもうやってきた。」

俺はいろんな教会がもうやってきたゆうて言うたやろ。

それはもうやってきた。初めのもんは後からやってくる。それは一頭の野獣や。666[31]。666，それだけや。666は一人の男の数字や。バイブルはそう言うとる。バイブルは男の数字を確証しとる。地上に一人の男の名前。それは必ず来る。誰であれこの数字を手に入れたら，自動的に，俺は自動的にと言うとく，バイブルは言うとんや。おまんは他の牧師に聞いたらええ。

バイブルは言うとる。「もしも，このバイブルを読まぬ者は盲人なり」ゆうて。めくらは666を手に入れる。めくらは地獄の業火に落ちる。誰でも666を見るもんは自動的に鋭い一撃が！教会，おまんが教会に行っとっても666を手にしたら，教会？ちりあくたや（ごみやくずや）。

神の言葉はおっしゃっとる。「教会，お前は教会に行くが，お前は地上の法を手にする。王国へ行く道のない者」。神が王国や。

そやから，おまんは天国へ行きたい。そやけど，連中はイエス・キリストを殺したやろ。でっかい王国を連中は殺したんや。おまんはこうやって死ぬんや。なんでおまんは666を手に入れるんや？なんでや？地上の人間は一つも王国を持っとらんのや。

おまんが666を手に入れたら，自動的に地獄の業火に落ちるんや。おまんには他のチャンスはない。おまんは終わりや。バイブルはそう言うとる。

数字には２つある。神の数と地上の野獣の数や。地上の野獣の数が666なんや。天国の数，それは教会や。それは教会で，おまんは666から身をかわす。

この野獣は後からやってくる。バイブルはこう言うとる。「盗人は私より前にやってくる。」そやから，バイブルは教会に行くな言うとる。行ってもええけど，案配せえと言うとる。もし，俺らが案配せんかったら，めくらや。めくらがめくらを導く。そやから，おまんは人の言うことに従ごうたらいかん。バイブルにのみ従え。それが道や。バイブルにも言うとる。「私だけが道である。私だけがあらゆるものに通ずる道である。かつて，私はあった。後にも私があるであろう。私だけが真実を語る。」

そやから，おまんがバイブルに従うなら，おまんは神に従うことんなる。神自らが語られとる。バイブルに従うなら，そうや，おまんは神に従うんや。おまんが神に従わんかったら，めくらや。

７．祈りの力と勧め

マタイ福音書に「男よ，お前が信じ，悔い改め，洗礼を受ければ，神はお前に聖霊を与えられる。」と言うとる。「お前が病人に祈れば，病人はいやしを得る。毒を食わされても，お前は死なない」とある。

これはイエス・キリストの血が人間を癒やすんや。信心して，神の教会に入り，神の律法に従ごうたら，こういう奇蹟がついてくるんや。奇蹟はイエス・

キリストについてくるんや。こういう種類の奇蹟を地上の人間が起こすことができるんや。

神の教会だけが，イエス・キリストが起こしたような奇蹟を起こせるんや。

イエス・キリストは奇蹟を起こし，連中はイエスを殺した。ねたんで殺して，イエスは死んで天国におられる。イエスは奇蹟を起こして，天国へ行かれた。

なんで俺ら人間が奇蹟を起こせんゆうことがある？祈りにはパワーがある。イエスの弟子らはイエスに聞いた。「ヘイ，師よ！何でこうしたことが起こるんですか？俺らには奇蹟はできません。あんたができるんはどしてですか？」イエスは答えられた。「祈りにはパワーがある。お前達は祈れ。」

ほんでイエス・キリストが天に行かれた時，連中に殺されて天に行かれた時，イエスは聖霊を送られ，弟子達は聖霊を得て，病人に祈ったら病人は治った。弟子らはパワーを手に入れたんや。この奇蹟が今，俺らに起こっとる。

もし，パパがおられんかったら，おまんはどこで教会に行く？おまんが教会に行ったら，バイブルは言うとる。「このパワーはある。そうだ，お前はこのパワーを目にせねばならぬ。」

考えてみい。祈りは応えてくれる。おまんはただ祈りに祈るだけや。祈って，祈って，祈って，神は聞き届けられる。

構造分析

キンジャロの長大な語りの中から，我々はいかなるメッセージを受け取ることができるのか。そこにはいかなる宇宙論（コスモロジー）が含まれているのか。

私はキンジャロの語りから，その宇宙論と神学を析出するため，構造分析を施すことにしよう。

構造主義の立場によれば，人間の思考は二項対立をもとにして組み上げられ

る。世界を認識する際には，不定形な世界に二項対立の操作を加える（認識論的切断！）ことにより，それを構造化し，言説を表明する際にも，二項対立の操作により，メッセージをコード化するのである。すなわち，人間は二項対立を用いて外界からの情報をディコード（脱コード化）し，外界に向けて情報をエンコード（コード化）する。

構造分析とは，こうした人間の思考の普遍的操作を意識化して行使することにより，言説（たとえば，レヴィ＝ストロースにおける神話）をディコードし，それを深層において規定している構造を取り出す知的操作のことを指す。本稿においては，空間/時間，シティの内/外，ジュダ/ジェンタイル，神の時代/聖霊の時代などの二項対立の系列を通して，キンジャロの説教の認識論的切断を行うことにより，彼の説教を支配している構造を析出するのである。

まず，キンジャロの「世界」はシティ（ないしは宮殿）の内と外に分かたれる。

シティの内に住む者達はジュダと呼ばれ，白人である。ジュダは神自らが創造した者達であり，神から直接に知を与えられている。自動車や飛行機や潜水艦を白人達が発明したのも，神から与えられた知の賜物である。そして，ジュダの者達の中から14万4000人が神から救済に選ばれている。

一方，シティの外に生まれた者達はジェンタイル（異邦人）と呼ばれ，神によって創造されなかった者達である。パプアニューギニア人はもちろん，日本人もジェンタイルである。ジェンタイルは動物の世話を見るように生まれてきた者達で，その知も性も動物並みである。そのため，機械を何一つ創り出すことができず，戦い合うことをもって性としていた。そして，ジェンタイルの者達は神から救いへと選ばれてはいない。ここにおける救いとは，具体的には天国へ行けることを意味している。

これが世界の空間的構造である。

時間的には，世界は「神の時代」と「聖霊の時代」に分かたれる。「神の時代」のことは旧約聖書に書かれており，神がモーゼに与えた契約によって画される。だが，人々は次第にモーゼの言葉を信じなくなった。そこで，神はイエス・キリストを聖霊により処女マリアの腹の中に降ろした。イエスは新しい契約を創った。それは，イエスが最初に行った奇蹟，水から新しいワインをつくるという奇蹟（カナの婚礼）によって象徴される。そして，イエスが天国へ戻っていった後は，「聖霊の時代」となる。イエスは犠牲となって死ぬ時，シティの外で死ぬことを選択した。このことによって，ジェンタイルにも救済の可能性が生まれたのである。十字架上で流されたイエスの血がジェンタイルの罪を洗い流し，ジェンタイルを犯した罪から自由にする。そして，神は洗礼を施されたジェンタイルに聖霊を与え，聖霊が洗礼者を正しい道へと導いてくれる。これが，「聖霊の時代」である。

具体的には洗礼によって，罪は洗い清められるのである。だが，この罪の洗い清めは一回のみであり，その後は神の法（律法）に従って，罪を犯してはならない。罪を犯せば，それは自動的に神の元に報告され，死後，罪びとはその精算をせねばならない。そして，罪を犯さぬ純粋に浄い者のみが天国（しみ一つない純粋に浄い国，純白の国）へ行けるのである。それ以外の者は地獄（火の国）へ行く定めが待っている。

しかし，実際に，この世（地上）は罪や悪で満ちあふれている。というのも，サタンと数千人もの天使達が人間を罪に誘うからである。しかも，サタンと悪の天使達は人間の祈りをブロック（遮断）できるので，人が神に祈りを捧げても，それは神の元には届かない。ただ，異言で祈る時のみ，サタンらはその意味がわからず，ブロックできないため，神に祈りが届くのである。というのも，聖霊の力が異言をつくるからである。そして，異言による祈りにはパワー（力）がある。それは祈念したことを実現する力であり，奇蹟を起こす力があるのである。

そして，「ひたすら祈れ」という勧めとともにキンジャロの説教は締めくくられるのである。

以上が，構造分析により析出したキンジャロの宇宙論と罪と律法の神学の核心である。

我々は，次節において，キンジャロの神学をキリスト教最初の神学者，使徒パウロの神学と対照させることにより，その特異性を浮かび上がらせることとしよう。

キンジャロの神学とパウロの神学

パウロの律法に関する言説はきわめて錯綜しており，支離滅裂とは言わぬまでも，深い矛盾に満ちている。一方では，「ですから，律法とは聖なるものであり，掟も聖であり，正しく，かつ良いものです。（ローマ 7 .12）[32]」と言っておきながら，他方では，「律法に定められた業に頼る者は皆，呪いの下にあります。（ガラテア 3 .10）」と書いている。

そもそも，律法とは何か。それは神エホバが預言者モーゼにユダヤの民が守るべく与えた掟の総体を指す。すなわち，神の意志である。それによって，エホバはユダヤの民が律法を守ることと引き換えにユダヤの民を彼の選民となし恩恵を施すことを約束した。契約が成立した。モーゼは宣言する。「汝らもしこれらの律法を聞きこれを守り行はば汝の神エホバ汝の先祖等に誓ひし契約を保ちて汝に恩恵をほどこし給はん。（申命記 7 .12）[33]」

代表的なものはエホバがシナイ山上においてモーゼに与えた二枚の石版に記された掟（出エジプト24-31）であるが，律法はそれにとどまらず，レビ記や申命記などの中に書かれた無数の細々とした掟の総体である。

そして，ユダヤ教は何よりもまず，この厖大な律法の遵守をその中核とする。「今日汝の神エホバこれらの法度と律法とを行うこと汝に命じ給ふ。されば，

汝，心を尽くし精神を尽くしてこれを守りおこなふべし。(申命記26.16)」

そして，キリスト教はユダヤ聖書をイエス・キリストによって人間が神と結んだ「新たな契約」(新約）の前提として「古い契約」(旧約）が記された書として，自らの内に取り込み，旧約聖書として位置づけた。

そして，キリスト教の，律法に対する根本的立場は以下のイエスの言葉に尽くされる。

「あなた方は，私が律法や預言者の教えを廃止するために来たと思ってはならない。廃止するためではなく成就するために来たのである。

あなた方によく言っておく。天地の続く限り，律法の一点一画も消えうせることはなく，ことごとく実現するであろう。

だから，最も小さな掟の一つでもこれを無視し，またそうするように人々に教える者は，天国で最も小さな者と呼ばれるであろう。しかし，掟を行い，またそうするように教える者は，天国で大いなる者と呼ばれるであろう。

あなた方に言っておく。もしあなた方が律法学者やファリサイ派の人々以上に神のみ旨を行う生活をする者でなければ，あなた方は決して天国にはいることはできない。(マタイ５，17-20)」

ところが，「コリント人への第二の手紙」において，パウロはこう宣言する。

「それで，キリストにおいて古い契約が破棄されたという事実が覆いを取り除かれずに隠されているのです。(二コリント３.14)」と。

これは，マタイが伝えるイエスの律法観と根底から対立する見解である。どう言い繕ってみても自らが律法を成就しにこの世に現れたというイエスの言葉とイエスによって古い契約，すなわち律法が破棄されたというパウロの言葉は両立しない。

それでは，パウロはいかなる根拠を持って，律法を否定するのだろうか。

それはパウロの人間観に深く関わっている。

パウロは言う。

「しかし，聖書は全ての者が罪のとりこになっていることを示しています。(ガラテア 3.22)」

なぜか？

「私は「肉」の弱さをまとった人間で，罪に売り渡されたものです。(ローマ 7.14)」であるからだ。

ここにおいて，パウロの神学を規定する彼の霊肉二元論が出現する。

パウロの霊肉二元論は，近代形而上学に現れる心身二元論とは全く異なるものである。すなわち，パウロは人間が霊と肉より成るという意味で霊肉二元論を唱えているわけではない。

それでは，霊肉二元論とはパウロにおいて何を意味するのか。

まず，我々は「肉」とは何かを見てゆこう。「肉」はもちろん，人間の肉体に発する概念であるが，パウロにおいては人間のエゴイズムを表象する概念に転化されている。フランシスコ派の神学者達によれば，「「肉」は，霊に導かれていない自己中心主義の人間を指している[34]。(新約聖書 注(1) p543)」すなわち，「肉」における人間はエゴイストである。再び，フランシスコ派の神学者達に従うなら，「人間には，自己中心的な傾き（パウロがいう「肉」）があるので，律法に表されている神の意志に従わない。(同上)」

すなわち，「肉」とは人間が（「霊」に従わない限りは）必ず陥るところのエゴイズムの表象なのである。

パウロの人間観においては，「霊」なしでは，神の意志（＝律法）に従うことができない。

「なぜなら，「肉」の思いは神の敵であり，神の律法に従わない，いや，従うことができないからです。(ローマ 8.7)」

人間は「霊」なしでは，すなわち自然状態においてはエゴイズムに支配されており，神の意志（＝律法）に従うことができない。このような「罪の虜」とも言うべき深いペシミズムに満ちた眼差しで，パウロは人間という存在を見て

いることを私たちは記憶しておこう。

それでは,「肉」と対置される「霊」とは何か？

先の律法随順不能説とでも呼ぶべきパッセージの直後，パウロはこう発言する。

「キリストの「霊」を持たない者は，キリストのものではありません。(ローマ 8 .10)」

どうやら，パウロにおける「霊」とは日常的に語られる「霊魂」とは違うようである。

「イエズスを死者の内から復活させた方の「霊」が，あなた方の内に宿っているなら，キリストを死者の内から復活させた方は，あなた方の内におられるその「霊」によって，死ぬべき体をも生かしてくださるのです。(ローマ 8 .11)」

パウロの言う「霊」とは，単なる霊魂ではなく,「神の霊」すなわちキリスト教の「神」の三位一体のうちの一位格である聖霊だったのである。

再び，フランシスコ派神学者の注解によれば,「聖霊は我々の内に宿って我々を生かし，神と結びつける者であり，したがって，我々の命である。(新約聖書 p547 注(4))」

すなわち，パウロの霊肉二元論における霊とは聖霊（＝神の霊）のことを指していたのである。近代の心身二元論においては，いかなる人間も心と身体から構成されるが，パウロの霊肉二元論においては，聖霊を内に宿さない人間は「霊」をもたない，すなわち,「肉」のみからなる人間である。

それでは，聖霊を内に宿す人間とはいかなる人間なのか。

マックス・ウェーバーによれば,「使徒時代においては，霊は孤独なる個人の上に降ったのではなかった」(ウェーバー，1996，p703),「むしろ霊は信者の集まりの上に降るか，あるいはその集まりの時の参加者のなかの一人もしくは若干のひとびとの上に降った。福音が述べ伝えられたときに,「霊」は「集会」に「ふりそそぎかけられた」のである。」(ウェーバー，1996，p704)

そのような聖霊降臨の情景は，福音史家ルカによってその使徒行伝第二章冒頭において次の如く記されている。

「五旬祭の日（ペンテコステ）が来て，みんなが一つ所に集まっていた。そのとき突然激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ，彼らが座っていた家じゅうに響き渡り，炎のような舌が現われ，分かれておのおのの上にとどまった。すると，みんなは聖霊に満たされ，聖霊が語らせるままに，さまざまな他国の言葉で語り始めた。」

これが，キンジャロの説教の中で，神との交流において決定的な役割を果たす「異言」の聖書上の根拠である。そして，キンジャロの属するリヴァイヴァル・センターのようなペンテコステ派と呼ばれる20世紀になって興ったキリスト教のリヴァイヴァル・ムーブメント(35)においては，キリスト教の誕生を画すると言われるこのペンテコステの日の聖霊降臨による異言の奇蹟を再現することを以てその目的ともすれば，特徴ともするのである。実際，リヴァイヴァル・センターの礼拝は，メンバーが皆直立して「ハレルヤ，ハレルヤ，ハレルヤ…」と叫び始め，それが，おのおの独自の祈りの言葉に変じて結ばれていく。

こうした異言による祈りは聖霊の導きによるものとみなされる。パウロが「ローマ人への手紙８.26」において告げるように。

「私達はどのように祈るべきかを知りませんが，聖霊ご自身が異言を通して，私達のために執りなしてくださるのです。」

使徒時代の原始キリスト教会は，信徒達が発する異言による祈りで満ちあふれていたと考えられる。「異言を話す人は，人間に対して話すのではなく神に対して話すのです。誰にも分からないが，「霊」によって神秘を話しているからです（一コリント14.２）」

このような状態をもって，パウロは「聖霊を内に宿す人間」であるとする。

「あなた方は知らないのですか。あなた方は神の住まいであり，神の霊が自分達の中に住んでおられることを。(一コリント３.16)」

原始キリスト教会におけるその祈りの光景は熱狂的で異常なものであったと考えられる。パウロ自らが認めているように。

「教会の全員が一つ所に集まり，みんなが異言を話しているところに，賜物を受けていない人や信者でない人が入ってきたら，あなた方を気違いだと言わないでしょうか。(一コリント14.23)」

しかし，それは神による狂気であるとパウロは保証する。

「私達が正気でないとするなら，それは神のためにそうなのです。(二コリント5.13)」

そして，フランシスコ派神学者は注において，「正気でない」(文字通りには「自分を離れて」「我を忘れて」)(p647，注(5))と追記している。

すなわち，ここに言う狂気はギリシャ語のエクスタシス（脱魂・忘我・法悦・恍惚）を意味している。事実，「使徒行伝22.17－18」において，パウロは「私はエルサレムに帰った後，神殿で祈っていた時に，脱魂状態になり，主を見ました」と告白している。

このような状態を以て，パウロは「聖霊を内に宿す」こととしているのだ。

エクスタシスという言葉は人類学者に，シャーマニズムを想起させずにはおかない。事実，パウロは「コリント人への第二の手紙」において，自らのシャーマニスティックな天空飛翔体験を語っている。

「この人は，十四年前－体ごとであったか，体を離れてのことであったかわかりません。神がご存じです－「第三の天」まで連れて行かれました。そして，この人が（中略）楽園にまで連れていかれ，口にするのも畏れおおい言葉，人間には語ることが許されていない言葉を聞いたのを，私は知っています。(二コリント12.2)」そして，そのような人間（すなわち，パウロ自身のこと）を「キリストと一致した人（二コリント12.2)」と呼ぶのである。

ある種のシャーマニズムにおいては，エクスタシーに陥ったシャーマン（ないしは霊媒）が自らの体の中に精霊ないしは神を憑依させ，自らの口を借りて，

その言葉を語らしめるのであるが，それは使徒行伝第二章のペンテコステの日に，「するとみんなは聖霊に満たされ，聖霊が語らせるままに，様々な他国の言葉で語り始めた」を想起させないであろうか。

事実ペンテコステの日の聖霊憑依の後，使徒達はシベリアのシャーマンのように病気直しの力能を発揮し始めるのである。（使徒行伝第 3 章，第 5 章12-16節）

シャーマニズムと異なるのは，聖霊憑依が単に職能的な霊能者にではなく，イエスの再臨を信ずる信徒全員に平等に生起するという点にある。言わば，原始キリスト教団に属する全員がシャーマンと化す点に原始キリスト教の特異性があるのである。再び，ウェーバーの言を借りるなら，「「霊」がエクスタシスをともなう集団的現象となったという事実が原始キリスト教集会の特徴となっていた（ウェーバー，1996，p901）」のである。そして，キリスト教における神の前の平等とは，こうした聖霊憑依が信徒全員に平等に聖霊の賜として与えられることを意味した。逆に聖霊憑依の賜を受けないものはキリスト教信徒ではない。「キリストの「霊」を持たないものは，キリストのものではありません。（ローマ 8 .10）」とパウロが言うように。

こうして，聖霊の賜を受けた者は「神の住まい」となる。

「あなた方は知らないのですか。あなた方は神の住まいであり，神の霊が自分達の中に住んでおられることを。（一コリント 3 .16）」

鶴岡真弓は宗教現象学者ヴァン・デル・レーウの宗教類型論を承けて，宗教を内在型宗教と超越型宗教に分かつ。鶴岡は内在型宗教とは「「聖なるもの」が人間の精神の内部に存在するという性質，「内在性」を強調する立場（鶴岡，2007，p439）」であり，「超越型宗教とは「聖なるもの」が人間をはるかに超越した存在であるという性質，「超越性」を強調する立場である（鶴岡，2007，p439）」と言い，「セム人の宗教すなわち「ユダヤ教やキリスト教（鶴岡，2007，p441）」を超越型の宗教に分類するが，私見では，キリスト教，少くとも

使徒時代の原始キリスト教団は，聖霊概念の導入により，超越神エホバを聖霊を介して，信徒の中に内在させた点において，(「あなた方は神の住まいであり，神の霊が自分達の中に住んでおられる」) 超越と内在の両契機を止揚し，綜合したという点において画期的なのである。

そして，こうした聖霊降臨は使徒時代の原始教会においてのみでなく，今日のニューギニア高地においても，生起している。

「聖霊が現れた。その火は私の方にやって来て，あちらこちらへ，草刈りナイフのように教会の中を刈り取っていった。座っていた者を皆，聖霊は蹴り上げて回った。みんなは地に倒れ，声を上げて泣き，大声をあげて呼ばわった。リヴァイヴァルは火花のように進んだ。それは3月10日のことだった。(Robbins p129)」

パウロの理路を今少し，追跡してみよう。

パウロは「人は律法の実行ではなく，ただイエス・キリストへの信仰によって義とされる（ガラテア2.16)」と宣言し，ルター神学の中核を成す信仰義認論を唱えるのであるが，その信仰すら，聖霊体験なしにはありえない。

「聖霊によらなければ，誰も「イエズスは主である」と言うことはできません（一コリント12.3)」からである。

逆に，聖霊を身に享ければ，それは自動的にエゴイズムを本質とする「肉」の原理から解放してくれる。

「神の霊があなた方に宿っている限り，あなた方は「肉」の支配下にあるのではなく，「霊」の支配下にあるのです。(ローマ8.9)」

こうして，「聖霊を内に宿す」ことによって，「命をもたらす原理としての聖霊が，あなたを罪と死の原理から解放して（ローマ8.2)」くれるのである。

人はシャーマニスティックな聖霊憑依を通して，エゴイスティックな「肉」の原理から，「罪と死の原理」から解放される。これが，パウロの神学の要をなす認識である。

肉的存在としての人間に対する絶望から出発したパウロの世界観は聖霊憑依の体験によって反転し，エクスタティックな生命の讃歌へと突き進む。

「さあ，ここで，私は，あなた方に一つの神秘を告げます。私達は，みんながみんな死の眠りにつくわけではありません。しかし，みんな変えられるのです。最後のラッパが鳴り響く時，たちまち，一瞬のうちにそうなります。ラッパが鳴り響き，死んだ人間は復活し，滅び去らないものとされ，そして，私達は今とは異なるものに変えられるのです。(一コリント15：51-52)」

ここに原始キリスト教のもう一つの主題，終末論とともに，人間の再生と変身（メタモルフォシス）のテーマが出現する。それでは人間はいかに再生し，変身するのか？

「自然の命の「体」として蒔かれて，霊的な「体」として復活する（一コリント15.44)」のだ。

肉体から霊体へのメタモルフォーゼ！こうして，「肉」的存在から「霊」的存在への転換は成就される。

「私達は皆，鏡のように主の栄光を映し出しながら，主の「霊」によって栄光から栄光へと，主と同じ姿をもった者に変えられていくのです。(二コリント３.18)」

メタモルフォーゼは窮極において，主イエス・キリストの姿へと変身することにより完結する。

聖霊憑依は人を主イエス・キリストと等しいものとするまでに到るのである。

そのような聖霊降臨を私は1986年８月，ニューギニア高地インボングの地において目撃した。拙著の一節から，その光景を示しておこう。

「皆が己れの世界に没入し，存分に情緒に浸っている。皆の興奮が私にも乗り移ってくる。聖霊の炎が教会の中にいる全ての者の心を吹き抜け，皆は聖霊に満たされて一つになる。エクスタシーという言葉が私の心に浮かんでくる。忘我，法悦，恍惚の歓喜に誰もが身を揉みしだかれ，心を震わせる状態。心と

体のエネルギーの惜しみない蕩尽。これなのだ。昼夜を分たず，聖霊の集会を行わせているものは。蜜よりも甘美なこの経験こそ，神がその忠実な僕に与えられている報償なのだ。神は天国にこのように甘やかな心の蕩ける喜びを用意しておられるのだ。(塩田 2006，p424)」

そして，その果てに，この聖霊運動の精神的リーダーだったククは私に告げた。

「シオタ，うちは，イエスが変え給うて，うちがイエスになったんや。(塩田 2006，p438)」

パウロの即身成仏論とでも言うべき聖霊の神学は，確かに原始キリスト教会の聖霊憑依の体験に裏打ちされたものであったのだ。

そして，その極限において，パウロは高らかに告げる。

「すべてのことが，私には許されている。(一コリント6.12)」

フランシスコ派の神学者は「この表現はおそらくパウロ自身が，モーセの律法の束縛から解放されたキリスト教徒の自由について述べるに当たり用いたものであった（新約聖書 p593 注(6))」と記している。

「すべてのことが，私には許されている」

なぜなら，「キリスト・イエズスにある命をもたらす原理としての聖霊があなたを罪と死の原理から解放してくれたから（ローマ8.2)」である。

こうして，律法はもはや不用のものとなる。聖霊を内に宿した人間が窮極的に神の子イエス・キリストと一体の者へとメタモルフォーゼするなら，何故に，彼は神の意志である律法を破り得ようか。

「すなわち「肉」のせいで無力であった律法の成しえなかったことを，神は成し遂げられました（ローマ2.3)」というわけである。

言わば，パウロは聖霊憑依の体験を発条にして，律法を脱構築したのである。

「もし，「霊」に導かれているなら，あなた方は律法の下にはありません。(ガラテア5.18)」

これはキンジャロの神学の中心命題,「おまんは律法に従わなならん！罪人かて信仰することはできる！」と真正面から対立する。

キンジャロの立場はパウロの立場と対極に位置するユダヤ的キリスト教の指導者，イエスの弟であるヤコブの神学に近い。

ヤコブは言う。「自由をもたらす完全な律法を一心に見つめてそれを守る人は，聞いて忘れてしまう人ではなく，実際に行う人です。(ヤコブ１.25)」

ヤコブにとって，律法は自由をもたらすものであり，それを行う者こそ，真のキリスト教徒である。

それに対して，パウロにとっては律法は抑圧をもたらすもの以外の何者でもない。

「そのイエズス・キリストへの信仰の時代が来る前は，私達は律法の下で監視され，信仰が啓示されるようになるまで，閉じこめられていました。(ガラテア３.23)」

パウロは有名なダマスコ途上の回心（使徒行伝第9章）を行う前は，厳格なパリサイ派のユダヤ教徒であり，最初は原始キリスト教に対する激しい迫害者であった。(使徒行伝７.57-8,1a：８.３；22. ３-５）ところで，パリサイ派とは「不浄なもの，異教的なるものを全面的に排除し，生活のあらゆる面を律法によって規定しようとした（荒井，1997, p246)」者達である。これはパウロの聖霊による律法の脱構築とは真正面から対立する立場である。パウロはダマスコ途上の回心によって，自らの立ち位置を180度反転させたのである。

パウロはイエスやヤコブとは異り，ユダヤの地で生まれたユダヤ人ではなく，いわゆるディアスポラ（離散）のユダヤ人で，小アジアの都市タルソスで生まれ，ローマ帝国の市民権を持ち，ギリシャ語で読み書きのできる，ヘレニズムの文化に浴して育った「よく名の通っている町の市民（使徒行伝21.39)」であった。ミルチャ・エリアーデによれば，キリスト教への回心後,「異邦人（ジェンタイル）の使徒」となったパウロは,「ヘレニズムの宗教的語彙（グノーシ

ス，ミステリオン，ソフィア，キリオス，ソーテール）を使用しただけでなく，ユダヤ教や原始キリスト教に知られていなかった概念を採用している。例えばパウロは，グノーシス主義に根本的な考え方である，劣等な「心的人間」と「霊的な人間」を対置する二元論をとり入れたのである。キリスト教徒は，純粋に霊的な存在（プネウマティコス）になるために，肉体的人間であることを放棄しようとするようになった。（エリアーデ，2000，p204）」パウロの霊肉二元論は，ヘレニズム，すなわち古代ギリシャ起源だったのである！

パウロのこの二重の文化的出自，すなわちヘレニズム＝ギリシャ文化圏で生を享けたユダヤ人，が原始キリスト教をユダヤ教とヘレニズム密儀宗教のシンクレティズム（諸教混淆）宗教へと変質させていったのである。そうした，イエスの原初的ユダヤ的終末運動の，ヘレニズム文化の浸透したローマ帝国下における「世界宗教」への変質過程がパウロにより推進され，使徒時代に続く教父の時代に継承・展開されてゆくのである。

そうした原始キリスト教の世界宗教への変成過程を進行させた中核となった概念が，「聖霊」であった。

ニューギニア高地におけるキリスト教の土着化においても，聖霊概念が決定的役割を果たしたことは拙稿『神の国，神の民，聖霊の風―パプアニューギニアにおける聖霊運動と神権国家への希求―』において詳述したが，ここでは聖霊憑依を味わったニューギニア高地民の証言を挙げておこう。

「以前は神だけがいてその神は我々から遠かった。今や我々には毎日の生活に力を与えてくれる聖霊がいる！（塩田 1998 p52）」

宣教師が伝えた超越神エホバはニューギニア高地の民にはよそよそしい存在に過ぎなかった。その異土の神をニューギニア高地民の精神の中に内在化させたのが，集団的聖霊憑依の体験だったのである。

「罪，神の恩寵，三位一体論など抽象的で思弁的な神学的概念を正確に表す理論的語彙もロゴスも欠く，それら石器文化の民達は聖霊のほとばしりと聖霊

による充たしという聖なる経験一つを頼りに一気にキリスト教の核心をなす現世超越の根元的原理をつかみ取ったのである。(塩田 1998 p58)」

すなわち，ニューギニア高地民は聖霊憑依という身体的体験を通してキリスト教の超越的世界へと参入していったのである。

キンジャロの回心においても，洗礼による病の治癒という身体的体験が決定的契機となっている。しかし，彼には聖霊憑依体験はない。むしろ，彼は洗礼における回心から直ちに聖書解読によるキリスト教の神秘の獲得へというきわめてロゴス中心的なキリスト教参入の道を採ったのである。

キンジャロの略歴において示したように，またキンジャロ自身その説教で語っているように，彼には全く学校教育の経験がない。したがって，彼は回心前は全くの文盲であった。

だが，キンジャロによれば，「神は俺の目を開いてくださり，俺の頭を明るく照らしてくださった」のである。彼は神の恩寵により，突如，アルファベットが読めるようになり，ピジン語聖書の解読へと突き進んでいったのである。それはヘレン・ケラーが水を water という文字によって表わせることを知った時に開示されたエクリチュールの世界の出現にも匹敵する奇蹟的体験であった。

キンジャロのそれからの生活はひたすら聖書を読みふけり，その文言の中から神の秘密のメッセージを発見することに費やされた。畑仕事や家事などの一切は妻に委ねた。そして，教会においても牧師の助手として「神の言葉，バイブルを声に出して読む」ことを権能として与えられた。

キンジャロの生は挙げて，聖書を読むこと，そこから神の秘密のメッセージをつかみ取ることに捧げられたのである。

このロゴス中心主義は，聖霊憑依という身体的経験の優越するニューギニア高地のキリスト教にあっては，きわめて特異なものである。とりわけ，彼が回心前には一切の学校教育を受けていなかったことを考慮に入れるならば。

牧師達もまた，聖書の章句をロゴスに基いて読み解き，説教する。だが，彼らはバイブル訓練校（Bible Training College）に入れられ，白人宣教師から与えられた聖書解釈と説教の技法（テクネー）の鋳型にはめられることを通じてロゴスを獲得するのである。

だが，キンジャロは「どこの学校でも勉強しとらん。誰一人，牧師は教えてくれんかったし，どこの学校も俺を教育してくれんかった」と言う。

逆に，それがキンジャロをして，学校教育や教会の鋳型にはまらぬ独自の特異な神学を生み出すことを能わしめたのである。

神は聖霊憑依の賜物をキンジャロには与えなかったが，「神は俺の目を開きたまい，神の言葉を見て知ることができるようにしてくれ，その意味を案配する力を与えたもうた」のだ。

そして，聖書とその解釈を他者に働きかける根拠とし起動力として，ロゴスの力により精神的に武装する。

彼は聖書を読みぬきその意味を考え抜くことによって，一般の人間が知り得ない非知の領域（生と死，天国と地獄，神の意志，聖霊とサタン等）を知ることを得た。

そうした非知の領域に関する知は彼の言葉に超越的根拠と超越的権威を与える。そして，構造分析で示したように，彼は論理的に一貫した体系的（それが我々近代人の目から見ていかに稚拙に映ろうとも）な世界観を築き上げた。そして，それは常に聖書に依拠している。（「俺はその牧師に聞いたる。「それはバイブルのどのページにあるんや。教えてくれ」ゆうて。」あるいは「そやけど，俺は聞くことができるんや。「どいよなバイブルにのっとんのや？バイブルは俺も見ることができるけど，どこにのっとんのや？」」）その意味で，彼は神学者であって，預言者ではない。神が直接，彼に語りかけるのではない。彼の宇宙に関する体系的な宇宙論は聖書を解釈することにより構築されたのである。この事態を我々はニューギニア高地における「ロゴスの誕生」と呼んでも

よいであろう。

キンジャロはロゴスと強烈な自己抑圧（「小っちゃい罪が一つでもあったら，この小っちゃいんが請求するんや」）をバネにして，他者に働きかける。キンジャロの説教の全篇には，彼の強烈な「権力への意志」が脈打っている。すなわち，他者を自らの言葉に従わせようという意志が。

彼の神学が「聖霊の充たしの神学」ではなく，「罪と律法の神学」になる所以はここにある。そこにおける「聖なるもの」はエクスタシーによる「聖霊の充たし」ではなく，律法，すなわち神の意志なる命令と禁止の体系として現れる。すなわち，内在性の契機ではなく超越性の契機が彼の神学を支配するのである。

この超越性への指向は，彼の権力論のもう一つの柱，「祈りにはパワーがある」において，再び宇宙論的相貌を帯びる。彼が異言で神に祈る時，「何を俺が頼んでも次々と実現するんや」。ここには自らの超越的な力に対する驚きと昂揚と確信が語られている。彼は自らの意志を世界に強制し，従わせるメカニズムを手に入れたのだ。彼は異言による祈りによって，世界に自らの意志を押しつけ，強制することができる。それは「聖霊の力が異言をつくって，これを神御一人が聞き分けることができる」からである。異言による祈りは世界を超越する神に直接聞き届けられ，神はその祈りを世界に対して命令する。こうして，キンジャロの異言による祈りは自動的に実現するのだ。

「なんで俺ら人間が奇蹟を起こせんゆうことがある？祈りにはパワーがある」キンジャロによれば，人間には祈ることによって奇蹟を起こす力さえある。すなわち，世界の因果関係を超越的に截ち切り，己れの意志を介入させる力が。キンジャロにおける聖霊はそうした奇蹟を起こす力を持つ祈りの産出者である。これはパウロにおける聖霊の宿りによるエクスタシーによって，人間を肉的存在から霊的存在に変え，イエス・キリストと一致させる「内在的」聖霊ではなく，世界の超越者である神に人間の発するメッセージを伝える超越的媒体（異

言による祈り）を創り出す「超越的」聖霊である。すなわち，キンジャロにとって，宇宙の超越的構造の一環を成すエージェントとして聖霊はある。

キンジャロは世界と神との関係を司る，垂直的で不可視のメカニズムを聖書の文言の中から析出したのである。それが，我々がキンジャロの説教に構造分析をかけることにより見出した宇宙論であり，神学であった。

キンジャロは聖書読解から得た超越的知を手に，人間に対しては罪と律法の神学を，世界に対しては異言による祈りを放って，力（パワー）への意志を炸裂させる。

ここに，ニーチェ・ハイデッガー・フーコーの知と権力に関する思想に連なる問題系列が顕現した。

おわりに

『聖書』は古代ユダヤ文化（旧約聖書）ないしは古代ヘレニズム文化（新約聖書）の中で生まれた書物である。それゆえ，その中には，古代中東文明ないしは古代地中海文明のアルカイックな思考様式が深く封印されている。それゆえ，ピジン英語訳の『聖書』は古代中東文明や古代地中海文明の思考様式を，数千年の時の流れをこえ，何万キロという空間的な距離をこえ，更には文化的無縁をこえて，パプアニューギニア高地のど真ん中に伝えることになったのである。

村人達の持っている唯一の，文字で書かれた書物，ピジン英語訳の聖書を通して，パプアニューギニア高地の伝統的新石器文化の思考様式と古代中東・ヘレニズム文明の思考様式の習合，というよりも化合が生じつつあるのである。これは，きわめて瞠目すべき文化的実験である。

異国の神であるキリスト教の神が，先祖伝来の神々や精霊を駆逐してしまった現在，パプアニューギニア高地では，キリスト教の神という異物を自文化の

中に摂取することにより，新たな精神的遺伝子組み換えが行われつつあるのである。それは伝統文化を変容させると同時に，キリスト教の神をニューギニア高地化するプロセスでもある。

本稿は，パプアニューギニア高地のインボング族の一人の男が瀕死の大病をきっかけとして，キリスト教に回心し，ピジン英語で聖書を諳んずるほど読み抜き，その中から，きわめて特異な神学を樹ち立てていったプロセスを詳述し，そこから生じた思考様式の大胆な，根本的組み換えを，「ロゴスの誕生」として捉えた。そして，そのロゴスを，流動する現実世界の上に刻印することにより，秩序結晶体（コスモス）としての天国（しみ一つない純粋に浄い国，純白の国）を創出しようとする，新石器時代のニューギニア高地には存在しなかった抽象的な権力への意志の出現を我々は見たのである。

1　ニーチェは『善悪の彼岸』54で「いったい全近代哲学は究極のところ何をなそうとしているのか？」と問い，「デカルト以来―それも彼の先例に基づくというよりは，むしろ彼に対する反抗からして―すべての哲学者は主語・述語の概念の批判という見せかけのもとに古い霊魂概念の暗殺をたくらんでいる。いいかえれば，キリスト教の教義の根本前提にたいする暗殺計画である。認識論的懐疑としての近代哲学は，隠密にであろうと公然にであろうと，いずれにせよ反キリスト教的である」と自答している。

2　塩田光喜[2000]「ビジネスと福音－パプアニューギニアにおける都市文化の形成とその主体」，塩田光喜・熊谷圭知編『都市の誕生－太平洋島嶼諸国の都市文化と社会変容』，p95-96及び　塩田光喜[2006]『石斧と十字架－パプアニューギニア・インボング年代記』，p145-147参照。

3　塩田[2006]上掲書より p45-46を参照。

4　塩田光喜[1991]「村とイエププ－社会の構造と歴史の枠組」『アジア経済』XXXⅡ-7，P56-59を参照。

5　塩田[2006]上掲書より，p222-224参照。

6　塩田光喜[1994]「２つの主権，２種の法－ニューギニア高地における戦士共同体と国家」塩田光喜・熊谷圭知編『マタンギ・パシフィカ－太平洋島嶼諸国の政治・

社会変動』より p186-188参照。

7　塩田[1994]上掲論文より p188参照。

8　塩田[2006]上掲書より p132-137，p138-143参照。

9　同上 p160-161

10　同上 p203-204

11　同上 p298-340を参照。

12　同上 p345-406を参照。

13　同上 p440-443参照。

14　同上 p440-441参照。

15　同上 p337-338参照。

16　塩田[2000]上掲論文 p102参照。

17　同上 p103-107

18　同上 p107

19　2006年1月21日，ピーター・マイメへのインタビュー。また，Kocher Shmid[1999]も参照されたい。

20　キンジャロの説教は2006年8月15日，パプアニューギニア南高地州イアリブ郡アンブプル村のキンジャロの家で行われた。

21　タイフォイド・マラリアとは腸チフスを意味する。インボング族は白人到来後に入ってきた疫病にはマラリアの名を付ける。

22　Fはフィールド・ワーカーの略。私のことを指す。

23　カウリェンゲはアンブプル村の隣村。

24　クメはアンブプル村から3キロ離れた村。

25　マロワはサイラス・マロワと呼ばれるアンブプル村出身の男。30台前半。ポートモレスビーのバイブル・チャーチで牧師を務めている。

26　有名なカナの婚礼のエピソードを指す。ヨハネ福音書第2章で，洗礼者のヨハネからイエスが洗礼を受けて3日目に，イエスが行った最初の奇蹟を指す。イエスがカナにおける婚礼で，水をワインに変えた奇蹟をいう。キンジャロはこの出来事をもって，神と人間の古い契約（旧約）が終わり，新しい契約（新約）が結ばれた画期であるとする。

27　ピジン英語の「サベ」は「知・知識一般」を意味する。

28　ヨハネ黙示録第7章では，一人の天使がイスラエル人14万4千人の額に神の刻印を押すことが述べられ，第14章では小羊（キリストの隠喩）とともに14万4千人の人々が立ち，「この人々は（略）新しい歌をうたっていたが，地上からあがなわれ

た十四万四千人のほかは，だれもこの歌を学ぶことができなかった。(黙示録14.3)」と述べられている。

29　モスビー・ウィンディ。ジョアン・クク・アペ，すなわちサイモン・アペの妻の異母弟。キンジャロには義兄弟に当たる。キンジャロの説教にはモスビーも加わっていた。

30　インボング語で「火の場所，火のくに」を意味する。すなわち，地獄である。

31　ヨハネ黙示録第13章には，一頭の獣が地中から出てきて奇蹟を行い，人々の右手か額に獣の数字を刻印させたとあり，その数字が666である。「その名の数字を刻印されているもの以外は，物を買うことも売ることもできない（黙示録13.17)」という黙示はインボング族（のみならず，パプアニューギニア人）ならば，誰知らぬ者はない終末の徴である。

32　『新約聖書』はフランシスコ会聖書研究所訳のものを用いた。わかり易い翻訳と行き届いた注は大いに参考になった。

33　『旧約聖書』は文語訳を用いた。ニーチェの言う「雄大な風趣」(ニーチェ，1993，p100）を備えているのはこの訳しか見あたらなかったからである。

34　フランシスコ派神学者達の注は『新約聖書』(フランシスコ会聖書研究所訳）のページと注番号を示しておく。『新約聖書』p543，注(1)

35　ペンテコステ派については，塩田光喜[2007]「民族誌の貧困を越えて」『アジア経済』XLⅤⅢ-8，p50を参照されたい。

参照文献

日本語

荒井章三 [1997] 『ユダヤ教の誕生－「一神教」成立の謎』講談社

ウェーバー，マックス [1996] 『古代ユダヤ教（下)』(内田芳明訳）岩波書店

エリアーデ，ミルチア [2000] 『世界宗教史　第4巻　ゴータマ・ブッダからキリスト教の興隆まで（下)』(柴田史子訳）筑摩書房

塩田光喜 [1991] 「村とイエププ－社会の構造と歴史の枠組－ニューギニア高地のインボング族第4回」『アジア経済』32-7

[1994] 「2つの主権，2種の法－ニューギニア高地における戦士共同体と国家」塩田光喜・熊谷圭知編『マタンギ・パフィシカ－太平洋島嶼諸国の政治・社会変動』アジア経済研究所

[1998] 「神の国、神の民、聖霊の風－パプアニューギニアにおける聖霊運

東洋文化研究所紀要　第 153 冊
動と神権国家への希求」『東文研紀要』第136冊
[2000]「ビジネスと福音－パプアニューギニアにおける都市文化の形成とその主体」塩田光喜・熊谷圭知編『都市の誕生－太平洋島嶼諸国の都市化と社会変容』アジア経済研究所
[2006]『石斧と十字架－パプアニューギニア・インボング年代記』彩流社
[2007]「民族誌の貧困を越えて」『アジア経済』48- 8
鶴岡真弓 [2007]『黄金と生命－時間と錬金の人類史』講談社
ニーチェ，フリードリッヒ [1993a]『悦ばしき知識』（信太正三訳）筑摩書房
[1993b]『善悪の彼岸　道徳の系譜』（信太正三訳）筑摩書房

文語訳新旧約聖書 [1887]「申命記」
新約聖書（フランシスコ会聖書研究所訳注）[1979]
「マタイ福音書」
「ヨハネ福音書」
「使徒行伝」
「ローマ人への手紙」
「コリント人への第一の手紙」
「コリント人への第二の手紙」
「ガラテア人への手紙」
「ヤコブの手紙」
「ペテロの第一の手紙」
「ヨハネ黙示録」

英語文献
Kocher Schmid, Christin [1999] Expecting the Day of Wrath－Versions of the Millennium in Papua New Guinea: The National Research Institute
Robbins, Joel [2004] Becoming Sinners－Christianity and Moral Torment in a Papua New Guinea Society: University of California Press

定期刊行物
Papua New Guinea Post Courier 2007.7.31
Courier Japon 2007.5.13